大谷大学真宗総合研究所

研究所報

No.73　　2019. 2. 1.

目次

東京分室三年の歩み 1
2017(平成29)年度「指定研究」等研究経過報告 2
2018(平成30)年度「指定・一般研究」研究組織一覧(追加) 8
2018(平成30)年度「一般研究」(新規採択課題)研究目的紹介 9
2017(平成29)年度「一般研究」研究成果概要 10
海外学会参加・研究調査報告 23
国内学会参加・研究調査報告 30
歎異抄ワークショップ開催報告 34
公開講演会・公開研究会 35
東京分室 PD 研究員個人研究成果概要 40
彙報 41

東京分室三年の歩み

真宗総合研究所東京分室長　池上 哲司

2016年４月に開かれた東京分室はこの３月で３年を閲することになる。「東京という激しく流動する思想の場で自らの思索と研究を鍛え直す」ことを通して、研究員たちが優れた研究者として自立してゆくことを目指すという東京分室の理念はどれくらい実現できたのだろう。

研究員たちは東京という巨大な文化圏で、豊富な研究資料を最大限に利用し、多様な研究者との学問的交流を活発に行ってきた。まず、分室が親鸞仏教センター内に設置されたことが大きなメリットであった。親鸞仏教センターの図書を自由に利用できたし、またセンター研究員との学問的交流も容易であった。それ以上に重要なのは、親鸞仏教センターが湯島に位置していたことである。というのは、国会図書館や東京大学をはじめ主要な大学及び宗教関係の大学・研究所へは分室から30分ほどで行け、図書・資料の閲覧が極めて容易だったからである。

このことは他機関の研究者との学問的交流にも大いに役立った。その一例が分室主催の公開研究会である。東京分室では「宗教と人間」というテーマを掲げ、各研究員の研究関心に沿うかたちで外部から講師を招いた公開研究会を毎年２度ほど実施した。招聘講師は大学院博士課程学生から批評家、研究所研究員、大学講師、テュービンゲン大学教授といったバラエティーに富んだものとなり、新しい知見やまったく異なった角度からのアプローチが展開され、分室員各自の研究に裨益するところ大であった。とりわけ松澤研究員が計画した第６回の研究会は、立教大学大学院キリスト教学研究科との共催というかたちとなり、研究者レベルだけでなく機関レベルでの交流も実現できた。このほかにも、藤原研究員が智山勧学会主催の「宗学を問い直す」研究会に参加し、その成果が『日本仏教を問う　宗学のこれから』（春秋社、2018年）として出版された。

分室研究員相互の刺激および意見交換も非常に有益であった。研究者はどうしても自分の研究分野にしか注意を向けないきらいがある。その結果、研究は深まりこそすれ、他分野との連携は失われてしまう。下手をすると、その研究はバランス感覚を欠いた独善的なものとなってしまう。そこで本分室ではほぼ毎週一回の見当で「共同ゼミナール」をもち、担当者が発表を行い、それを材料として言葉遣い、論理の組み立て、発想・視点の確認、さらには当該発表の意義についてまで議論した。

この試みは研究員たちにとって苦しい経験であったにちがいない。これまで自分が学んできた領域では顧みられなかったような視点からの質問・批判を受けるのだからたまったものではない。それは常識ですと言っても相手は納得しない。大学での恩師の権威を持ち出しても通用しない。普通の言葉で普通の論理で相手を説得することが求められる。各研究員の出身大学から離れて、各自がひとりの研究者として立ち、自らの責任で応えねばならないのである。しかし、この苦しい経験は研究員に新しい視点と展望の可能性を示し、すくなくとも、ともすれば視野狭窄に陥りかねない自らの専門研究を相対化する一つのきっかけとなりえたのではないだろうか。

また、現在の宗教的現実と宗教的経験とを知るために、各地へ調査に赴いてもらった。2016年度にはタイにおいて、カレン族のキリスト教を調査し、チェンマイの僧院に入ってタイ仏教を体験した。2017年度にはアトスでギリシャ正教の僧院生活を味わい、ベルギーのオルヴァル修道院でもその生活を体験した。2018年度には沖縄石垣島・竹富島の御嶽と五島列島の隠れキリシタン遺跡を訪れる予定である。こうして様々な宗教的現実を知ることで研究員たちの宗教理解が一層深まることが期待される。

所期の目的通り、この３年間で自立した優れた研究者を育てることができたかどうかはまだ分からない。現在時点で２名の研究員が専任の大学教員として採用されている。他の２名の研究員も含めて、彼らがこれからどのように研究を進めていくかを注視していくことで、東京分室の営みの成否もまた明らかになるであろう。自由で風通しの良い研究を彼らが続けてくれることを、さらにこの東京分室の歩みが健やかに持続することを願うばかりである。

2017（平成 29）年度「指定研究」等研究経過報告

新しい時代における寺院のあり方研究

現代社会と寺院の抱える問題点の分析、およびそこでの寺院の果たし得る役割についての研究

研究代表者・学長　木越 康
（真宗学）

本研究は、人口減少や高齢化、地域構成員相互における関係性の稀薄化等の深刻な問題を抱える現代の地域社会において、寺院の果たし得る役割について研究し、その成果を公開しようとするものである。３か年の計画のうち初年度に当たる本年度においては、上記の目的に則しおよそ以下の活動を行った。なお既に研究所紀要 35 号（18 年３月刊）に研究の概要を、研究所報 71 号（17 年 12 月刊）、72 号（18 年８月刊）に本年度の随時の成果を提示しているので参照されたい。

①学外講師による研究会の開催：２回の公開研究会を行い、現状の把握と課題の明確化、及び各方面で活動し課題を共有し得る方々との連繋の深化に努めた。各地域・宗派において問題の深刻さが認識され種々対策が講じられつつあるものの、個別化・分散化・功利化が顕著に進む現代日本の社会状況全般と連関する問題ゆえ解決策が容易に見出せない現状と、その一方で過疎地域における寺院の活動がなお地道に行われ続けている現状とが改めて確認された。

②調査対象地域・調査内容の選定と調査の実施：本調査開始前に行った予備調査等を通じ、困難な状況にあるにもかかわらず、地域と寺院が密接に関わる形での諸活動が歴史的背景に裏づけられた形で行われ続けている点が確認できたことなどにより、対象地域を岐阜県揖斐川町春日地区に定めた。これに伴い現地での調査を計４回実施した。調査を通じ、厳しい現状の中で、地域社会の運営及び寺院の運営が従来の経緯を重視しつつ各々が密接に結びつく形で行われていること、それらの活動の重要な紐帯として寺院及びそれに関わる諸要素（行事、法要、葬送等）が認識されていることが確かめられた。また特に、本地域から他出した人々との繋がりを如何に保持・展開するかが大きな課題と認識され、種々の取り組みがなされていることが明らかになった。

③共同調査への参加：石川県七尾市での超宗派の「過疎問題連絡懇談会」主催の調査に参加し、地域と寺院の現状と課題に、より的確にアプローチする視点・手法の明確化、及び各方面との連繋の深化に努めた。

④以上の活動の外、研究課題の明確化や調査実施に際しての具体的な手法の確認、調査結果の分析等を行うミーティングを計 22 回実施した。またこの他にも、東北福祉大学の研究グループの訪問を受け研究情報の交換会を行った。

国際仏教研究

諸外国における仏教研究の動向の把握と資料の収集・整理・公開

研究代表者・教授　Robert F. Rhodes
（仏教学）

本研究は、諸外国における仏教を中心とした宗教研究の動向を把握するとともに、国際社会に対して本学の真宗・仏教研究を公開することを目的としている。近年、仏教学・宗教学の分野における国際化は以前にも増して急速に進んでおり、真宗についても外国語による研究を視野に入れなければならない状況にある。そうした動きに対応すべく、欧米と東アジアの言語文化圏を担当する二つの班を置いて研究活動を進めてきた。各班の研究成果の概要は以下の通りである。

〈英米班〉

Ⅰ．翻訳研究活動

(1)『浄土の真宗』『宗門の歩み』英訳出版への協力

阿満道尋嘱託研究員（モンタナ大学）を中心に進めてきた大谷派教師課程教科書『宗門の歩み』の翻訳チェックと編集校正作業に協力した。阿満嘱託研究員は 2017 年６月に来日、６月７日と 14 日に研究会を開催し、翻訳の難点について協議した。『宗門の歩み』は 2018 年８月にアメリカ真宗センターから刊行された。

(2)『歎異抄』翻訳研究プロジェクト

2016 年度に大谷大学真宗総合研究所とカリフォルニア大学バークレー校東アジア研究所および龍谷大学世界仏教文化研究センターの三機関による協定が締結され、合同で『歎異抄』およびそれに関連する近世近代の文献（講録等）を英訳研究するプロジェクトを立ち上げた。今後５年間の予定で年２回（３月にバークレー、６月に京都で１回ずつ）合同ワークショップを開催し、最終的に２冊の研究書（注釈付き本文英訳＋

研究論文集）出版を目標とする。その第２回ワークショップが 2017 年８月４日㈮から７日㈪に本学で開催され、研究班の研究員・本学の教員・本学の大学院生が多く参加し、江戸期の主な『歎異抄』の注釈書の翻訳が進められたとともに、近代の『歎異抄』注釈書および英訳について研究発表が行われた。

Ⅱ．国際学会・シンポジウム関係

(1) IASBS におけるパネル発表

2017 年６月 30 日㈮から７月２日㈰に武蔵野大学にて開催された国際真宗学会の第 18 回学術大会において、井上尚実研究代表（当時）を中心に以下の通りパネル発表が行われた。

パネルテーマ：「大谷派の近代教学における「利他」について」（'Benefiting Others' in Modern Shin Buddhist Doctrinal Studies of the Ōtani-ha）

川口淳（本学助教、真宗学）「清沢満之の『臘扇記』における「如意・不如意」の思想の一考察」（A Study of "In Our Power, not in Our Power" Thought in Kiyozawa Manshi's Diary Rōsenki）

東真行（本学助教、真宗学）「金子大栄の思想における利他－彼の浄土観と教団観」（Benefit for Others in Kaneko Daiei's Thought: His View of the Pure Land and the Religious Organization）

ジェフ・シュローダ（オレゴン大学講師）「この人を見よ－曽我量深と戦後の仏教改革」（Behold the Man: Soga Ryōjin and Postwar Buddhist Reform）

井上尚実「どうして往生が現在の生に起こらなければならないか－曽我量深の利他理解」（Why Should 'Birth in the Pure Land' Take Place in the Present Life?: Soga Ryōjin's View of 'Benefiting Others'）

川口・東・井上の発表に基づく原稿は『真宗総合研究所研究紀要』35 号に掲載された。

なおロバート・ローズ研究員とマイケル・コンウェイ研究員も大会に参加し、藤井淳（駒澤大学准教授）が企画したパネルにて発表した。

(2) EAJS への参加および発表

2017 年８月 31 日㈭～９月２日㈯、ポルトガル国リスボン市の Universidade Nova de Lisboa で開催された第 15 回ヨーロッパ日本研究協会国際会議（European Association for Japanese Studies）において、メリッサ・カーリー（オハイオ州立大学准教授）を招聘し、マイケル・コンウェイ研究員とともに哲学・思想史部会で以下の研究発表を行なった。

①メリッサ・カーリー「思いの瞬間と歴史の瞬間－浄土想像圏に対する田辺元の時間的解釈」"Thought-Moment and Historical Moment: Tanabe Hajime's Temporal Reading of the Pure Land Imaginary"

②マイケル・コンウェイ「時間の流れを逆さまに－曽我量深の捉えた信の一念における歴史性と可能性」"Inverting the Flow of Time: Soga Ryōjin's Grasp of Historicity and Potentiality in the Single Thought Moment of Faith"

(3) マギル大学における南都浄土教の国際ワークショップへの参加および発表

2017 年９月 29 日㈮にカナダのマギル大学において開催された「Pure Land Buddhism in the Nara Schools」という国際ワークショップにて、ロバート・ローズ研究員が「『往生拾因』における永観の念仏解釈」（"Yōkan's Interpretation of the Nenbutsu in the *Ōjō jūin*"）という題で発表した。

(4) AAR 参加

2017 年 11 月 18 日㈯から 21 日㈫にマサチューセッツ州ボストン市のハインズ会議場にて開催されたアメリカ宗教学会に、マイケル・コンウェイ研究員が、学界の動向を把握し、研究交流を行うために参加した。

(5) シンポジウム成果の出版準備

①*Cultivating Spirituality: A Modern Shin Buddhist Anthology* 出版記念シンポジウム成果出版

2015 年６月に本学で開催されたシンポジウムの成果を出版する予定で、そのためハワイ大学出版と出版契約を結び、ウェイン横山嘱託研究員と協力しながら、2019 年 12 月末の入稿に向けて編集作業を進めている。

②国際仏教シンポジウム「仏陀の言葉とその解釈」（ELTE 東アジア研究所と共催）成果出版

2016 年５月に本学で開催されたシンポジウムの成果を出版するための計画を立て、作業を進めている。ELTE のハマル・イムレ教授と井上尚実嘱託研究員の共編で、2019 年度に出版予定。

Ⅲ．公開講演会の開催

今年度は以下の２回の公開講演会を開催した。

（会場はいずれも響流館３階マルチメディア演習室）

(1) 2017 年 12 月 11 日㈪16：30～18：00

講師：ジョン・ロブレグリオ氏　John Lobreglio（*The Eastern Buddhist* 誌　編集者）

講題：「大正時代の日本仏教者の英米の人種差別に対する反応」（"Taishō-period Japanese Buddhist Reactions to Anglo-American Racism"）

(2) 2018年1月12日㈮16：30〜18：00
講師：ジェイミー・ハバード氏（Jamie Hubbard スミス大学教授・大谷大学真宗総合研究所客員研究員・当時）
講題：「神経生物学的な一闡提（ニューロバイオロジカル イッチャンティカ）：最後には、みんな真宗！」（"Neurobiological Icchantika: At the End of the Day, We Are All Shinshū!"）

Ⅳ．その他

国際研が収集してきた未整理の図書の整理・公開については、研究所所蔵の欧文仏教雑誌とデータ・ベースを照合し、欠本や図書館で継続購入している雑誌との重複などについて整理する作業を進めた。

〈東アジア班〉

Ⅰ．研究会

中国社会科学院歴史研究所との学術交流協定に基づく研究活動として２回の研究会を開催し、中国における宗教と文化に関する研究活動として１回の研究会を開催した。

(1) 中国社会科学院歴史研究所より４名の研究者を招聘し、2017年９月28日㈭に公開研究会を実施し、研究発表および討論を行った。３名の発表者と発表テーマは、以下の通りである。鄔文玲氏（中国社会科学院歴史研究所戦国秦漢史研究室副主任、研究員）「簡牘に見る漢代の契約文書」、陳爽氏（中国社会科学院歴史研究所魏晋南北朝隋唐史研究室研究員）「出土墓志に見る嫡庶の表記法と南北朝における嫡庶問題」、鄭任釗氏（中国社会科学院歴史研究所中国思想史研究室副主任、副研究員）「『春秋公羊伝』復仇説の主旨」。三氏の発表終了後に田波氏（中国社会科学院歴史研究所副所長）によりコメントが述べられた。

(2) 2018年３月６日㈫に松川節教授ならびに三鬼丈知任期制助教の２名を特別招聘者として中国社会科学院歴史研究所に派遣し、同所において公開研究会を開催した。それぞれの発表者と発表テーマは以下の通り。松川節「最近モンゴル国発現の若干の碑刻・岩壁銘文について」、三鬼丈知「中国医学における身体図像の展開について」。

(3) 2017年11月24日㈮に、坂井田夕起子氏（愛知大学国際問題研究所）を講師に迎え、戦中期における大谷派の海外布教に関する公開研究会を開催した。研究報告「真宗大谷派開教使神田恵雲とアモイ――雑誌『敬仏』『大乗』を素材として――」に基づき、今後の活用が望まれる関連史料や最新の研究成果などについて議論を深めた。

西蔵文献研究

チベット語文献のデータベース化

研究代表者・教授　三宅 伸一郎
（チベット学）

1　チベット語文献の電子テキスト化・画像デジタル化とその公開

本学図書館所蔵チベット語文献のうち、稀覯書であるシャクリンパ（shag rings pa/shag rin pa）著『プラサンナパダー注・本釈合璧心髄（*dBu ma tshig gsal ba'i ṭi ka bshad sbyar snying po*）』（蔵外 No.13964）の校訂テキストを、影印を付して刊行した。本文献は、『プラサンナパダー』の本文を引用しながらそこに注釈を施すというスタイルを採っているため、校訂テキストでは、読者の便を考え、引用される『プラサンナパダー』の本文に下線を付し、当該箇所のデルゲ版・北京版テンギュルにおけるロケーションを注記した。この作業の過程で、シャクリンパが引用する『プラサンナパダー』のテキストは、現行のテンギュルに収録されるテキストと使用されている語句が一部異なっていることがわかった。

また、宗林寺（富山県南砺市城端）に所蔵されている寺本婉雅旧蔵チベット語版『モンゴル仏教史』の刊行に向け、テキストの入力や、そのモンゴル語版である『エルデニィン・エリヘ（*Erdeni-yin Erike*）』のモンゴル語テキストのローマ字転写作業、チベット語及びモンゴル語テキストの対照作業を行った。また『プトン仏教史』の邦訳研究を行い、その研究成果は『真宗総合研究所研究紀要』第35号に掲載されている。

2　モンゴル国立大学との共同研究

モンゴル国立大学総合科学部のP. デルゲルジャルガル副学部長を本学に招聘し、共同研究を実施した。６月23日には同氏を講師として公開講演会を開催した（講演テーマ「匈奴の宗教信仰：仏教の伝播」）。詳細は『所報』No.71（p.36）参照。また、「ゴビアルタイ県に建立された黄教伝播初期の寺院・考古遺物に関する野外調査」を８月19日〜８月30日に実施した。詳細は『所報』No.71（pp.26-27）参照。

3　寺本婉雅関連資料の研究

今後の研究資料とするために、寺本家資料の調査と写真撮影を行なった。詳細は『所報』No.72（pp.35-

36）参照。

4. 海外の研究者・研究機関との交流

中国におけるチベット研究の拠点である中国蔵学研究中心との今後の研究交流に向け、北京の同研究中心を訪問し、関係者と意見交換を行った。詳細は『所報』No.72（pp.25-26）参照。

ベトナム仏教研究

ベトナム社会科学アカデミー宗教研究院との共同研究

研究代表者・教授　織田 顕祐
（仏教学）

当研究班は、ベトナム社会科学アカデミー宗教研究院との間で締結された「学術交流に関する協定」に基づき共同研究を推進するものであり、調査・研究協力のみならず将来に向けての研究者育成などのベトナム側からの要請に応じて、仏教研究に関する相互学術的交流を行うものである。2017 年度当初に研究目的として掲げた点は以下の通りである。各目標に従って 2017 年度の経過を報告する。

1.『ベトナム仏教概要』の日本語訳を進める

既に執筆が終了している分については、翻訳を完了した。未執筆分があるが、執筆担当者の病気療養により中断している。この点について６月の訪越の際に先方の責任者である宗教研究院院長と進め方を協議した。一応当方の提案を了承し、その後は責任を持つということであった。その後、本人から治療の効果が上がっているのでもう少し待って欲しいとの連絡があったとのことで、中断している。

2.『日本仏教概要』のベトナム語訳を進める

現在のベトナムでは、学術的なレベルで日本語－ベトナム語を使用できる研究者は極めて少ない。そうした状況の中で、ハノイ国家大学付属人文科学大学准教授の Pham Thi Thu Giang 氏と協力関係を構築することができた。氏は日本に留学し日本仏教の分野で博士の学位を取得した現代ベトナムを代表する若手の俊秀である。『日本仏教概説』の日本語原稿はほぼ完成しており、あとは細部の調整を残すのみである。同氏の協力によって当該研究課題は次年度以降飛躍的に進展すると思われる。

3. 現地フィールドワーク

本年度は現地フィールドワークを２回実施した。具体的な内容に関しては、『研究所報』No.71（27 頁～）、No.72（26 頁～）で既に報告しているので省略する。

4. ベトナム仏教関係資料の解読研究を実施

５月以来ほぼ毎月二回のペースで研究会を実施した。当該文献は『禅苑集英』と称し、ベトナム北部地域の禅宗の伝統を伝えるものである。現存するテキストの成立年代は比較的新しいが、成立年代が分かっている他の文献が本書を引用することなどにより、本書が古い時代のベトナム仏教の様子を伝えるものであることが確認できた。今後も鋭意解読を進めて、終了次第出版したい。

5. 現地における「日本語・日本研究、東アジア・仏教研究」の現状把握

今回実施したベトナム中部フエにおけるフィールドワークで、新たにフエ報国寺の釈福田（Tran Quoc Phuong）氏と出会うことができた。氏は、日本に留学し中国の天台思想の研究によって博士の学位を取得した学僧である。氏とも研究交流の確認ができたので次年度以降の諸課題の進展に協力していただけると確信している。

6. ベトナム関係文献資料の収集

新たにベトナム民俗信仰や地誌に関するもの数点を収集したが、詳細に渡るのでこの点は割愛する。

大谷大学史資料室

大学史関係資料の収集・整理

室長・教授　阿部 利洋
（社会学）

大谷大学史資料室の主な業務は、年史編纂を目的とした大学に関する史資料の①収集、②整理・保存、③公開である。

①これまで通り、図書館では保存されないような一時的な刊行物・パンフレット類の収集を行った。

②2018 年１月に総務課より、明治 32 年から昭和 27 年にかけての入学手続き関係書類の整理依頼を受け、全 55 点の目録作成を行った。目録化の作業は現在も継続中であり、あわせて適切な保存方法についても模

索していく。昨年から引き続き、武田武麿先生（元大谷大学教授）から寄贈された資料の整理と目録のチェック作業を行っており、21 組中 17 組まで完了した。

③図書館１階エントランスで、当資料室所蔵資料の展示を行った（２回）。「年表で見る大谷大学のあゆみ」では、分かりやすい年表を作成し、大学の歴史を紹介した。また「大谷大学を支えた人物－第十一代学長関根仁応－」では、2016 年に『関根仁応日誌』の全８巻刊行が完了したことを受けて、関根仁応師の大谷大学での事跡を取り上げる展示を企画した。

その他、大学史関係資料の保存・公開のノウハウを得るために、全国大学史資料協議会の全４回の研究会に参加し、他大学博物館等への見学・訪問を実施した。

デジタル・アーカイブ資料室

大谷大学所蔵貴重資料のデジタル・アーカイブ構築

室長・教授　阿部 利洋
（社会学）

1. パーリ語貝葉写本の研究とデジタル・データ化

デジタル・アーカイブ資料室では、100 年余り前のタイ王室より寄贈されたパーリ語貝葉写本（「大谷貝葉」）及びその包み布の包括的な調査をおこなっている。その調査では、今までに判明していなかった点が複数明らかになってきており、特に貝葉写本に記載されていた寺院名が判読された点は重要である。それを受けて、「大谷貝葉」に記載のあった寺院 Wat Liap（Wat Ratchabrana）を訪問し、同類写本の所蔵状況などを確認し「大谷貝葉」との関係を示す手掛かりを調査するため、タイに清水洋平・舟橋智哉（ともに当研究班嘱託研究員）の両氏を 2018 年３月に派遣した。詳細は、『所報』No.72（pp.27-28）参照。

タイ中部地域の王室寺院所蔵未整理写本所在リストの整理作業をおこなった。その作業で確認された本学所蔵写本と関連する稀覯文献の検討など、現在までのこれら一連の作業で明らかになってきた研究成果の一部を、清水洋平氏が 2017 年８月にカナダ：トロント大学で開催された国際仏教学会（XVIIIth Congress of the International Association of Buddhist Studies : IABS）で発表した。詳細は、『所報』No.71（pp.21-23）参照。

2018 年１月 22 日～23 日には、布等の分野の専門家（佐藤留実＝五島美術館、原田あゆみ＝九州国立博物館）と共に、本学所蔵写本と包み布の調査・研究をおこなった。尚、１月 24 日には、本学所蔵写本の稀覯文献についてデジタル写真撮影をおこなった。

2018 年２月 19 日～20 日には、本学所蔵写本と、浄土寺（神奈川県横須賀市）、智蔵寺（千葉県南房総市）が所蔵するパーリ語貝葉写本との関連を調査するため、清水洋平・舟橋智哉の両氏を派遣した。

2. 図書館所蔵古典籍のデータベース化

2010 年度から継続中の、本学図書館所蔵古典籍を書誌データベースとして登録する作業を行い、2017 年度には約 1,260 件のデジタル・アーカイブ化を進めた。

東京分室指定研究

宗教的言語の受容／形成についての総合的研究
－哲学的･宗教学的･人類学的視点から－

研究代表者・名誉教授　池上 哲司
（哲学・倫理学）

本研究は、宗教において語られる言葉が現実に生きるわれわれにとってどのような働きをもたらすかを、多様な観点から明らかにしようとするものである。以下に、本年度の主な活動を記す。

1. 共同研究発表

各研究員が自らの研究課題を宗教的言語という観点から発表し、それを他の分野の視点から議論・批判するというゼミナール形式の研究会を 22 回ほど行った。その際、発表者には他分野の者にも理解可能な説明をすることが要求された。

2. 各研究員の活動

• 松澤研究員

マイスター・エックハルトのドイツ語説教における言説をラテン語著作における言説と比較しながら、ドイツ語説教における「言葉」の特性について研究を進めている。今年度はエックハルトの「人間神化」という事柄を中心に考察した。

• 田崎研究員

聖書の翻訳に伴う現地語語彙とのずれや解釈の齟齬によって生じる問題やローカル社会の再編について、関連する先行研究を整理・検討した。夏期には、タイのカレン社会におけるキリスト教への改宗や聖書の翻訳がもたらす日常生活への影響について調査した。

・藤原研究員

2017 年度の活動の一つとして高野山への出張を行った。その目的は、1）高野山大学が所蔵する仏教典籍の閲覧、2）高野山という場での法然や親鸞に関わる遺跡の実地調査、であった。それらは、過去の仏教者が仏教の言葉をいかに書き留めようとしたかの努力の跡であり、かつ受け止められた仏教の時代・文化の中での表象である。そのような個々の営為を通して、宗教と人間の関りというものを考えてみた。

・稲葉研究員

初期（部派）仏教で使われる仏教用語や、仏教文献を伝える言語を研究した。仏教文献の抱える基礎的な問題を意識しながら、仏教用語の研究として sakkāya－の語義や非我・無所有の意味内容などを検討した。言語の研究ではパーリ語や仏教混交サンスクリット語の文法の共時的な面を検討した。

3. 海外調査

(1) 田崎研究員

2017 年７月 24 日㈪～８月２日㈬：チェンマイ→ボケオ行政区

カレンの人々の死生観、疾病、夢など、キリスト教への改宗以後はどのような新たな言葉で捉えられ、それと共に人々の認識が変容したかについて、フィールド調査を行った。

(2) 松澤・藤原・稲葉研究員

2018 年３月１日㈭～３月 16 日㈮：ギリシャのアトス修道院・ベルギーのオルヴァル修道院

アトスではギリシャ正教の勤行・瞑想といった修道院生活を体験し、またベルギーでは、オルヴァル修道院でカトリック（トラピスト会［厳律シトー会］）の勤行・瞑想を体験した。

4. 公開研究会の開催

第３回「宗教と人間」研究会

テーマ「伝統仏教と臨床仏教」

日時：2017 年８月 29 日㈫16：00～18：00

会場：親鸞仏教センター５F セミナー室

講師：吉水岳彦氏（臨床仏教研究所研究員、大正大学非常勤講師）

第４回「宗教と人間」研究会

テーマ「テーラワーダ仏教文献における善巧方便の諸相」

日時：2017 年 12 月５日㈫16：00～18：00

会場：親鸞仏教センター５F セミナー室

講師：河﨑豊氏（東京大学大学院人文社会系研究科　助教）

2018（平成 30）年度「指定・一般研究」研究組織一覧（追加）

■指定研究「ベトナム仏教研究」嘱託研究員の追加　（2018 年 10 月 1 日付）

研究名	研究課題及び研究組織	
ベトナム仏教研究	研究課題	ベトナム社会科学アカデミー宗教研究院との共同研究
	研究代表者	織田顕祐
	研究員	織田顕祐（教授・仏教学）
		浅見直一郎（教授・東洋史学）
		釆睪晃（准教授・仏教学）
		箕浦暁雄（准教授・仏教学）
	嘱託研究員	桃木至朗（大阪大学教授）
		大西和彦（ベトナム社会科学アカデミー宗教研究院客員研究員）
		Pham Thi Thu Giang（ハノイ国家大学附属人文科学大学准教授）
		宮嶋純子（関西大学東西学術研究所非常勤研究員）
		TRAN QUOC PHUONG（フエ仏教協会教育部副部長、フエ市仏教中高等学校副校長）【追加】
	研究補助員（RA）	NGUYEN TUONG GIANG（博士後期課程第 1 学年）

■科研費採択に伴う一般研究班の発足

【共同研究】　（2018 年 7 月 18 日付）

【2018～2020 年度「科研費」採択】一般研究（武田班②）	研究課題	歴史史料・考古資料活用による次世代作物資源の多様性構築に向けた学際的研究
	研究代表者	武田和哉
	研究員	武田和哉（准教授・歴史学・考古学・人文情報学）
		三宅伸一郎（教授・チベット学）
	協同研究員	吉川真司（京都大学大学院文学研究科教授）
		渡辺正夫（東北大学大学院生命科学研究科教授）
		矢野健太郎（明治大学農学部教授）
		江川式部（明治大学商学部兼任講師）
		横内裕人（京都府立大学文学部教授）
		鳥山欽哉（東北大学大学院農学研究科教授）
		等々力政彦（2017 年度一般研究武田班②協同研究員）
		佐藤雅志（東北大学農学部准教授）
		清水洋平（本学非常勤講師・特別研究員）

【個人研究】　（2018 年 8 月 24 日付）

【2018～2019 年度「科研費」採択】一般研究（阿部友香班）	研究課題	農業奉公の歴史社会学的研究－労働を通じた社会的包摂に着目して
	研究代表者	阿部友香（任期制助教・特別研究員）

■研究協力員の解任に伴う研究組織の変更　（2018 年 9 月 30 日付）

【2017～2020 年度「科研費」採択】一般研究（鈴木班）	研究課題	変動帯の文化地質学
	研究代表者	鈴木寿志
	研究員	鈴木寿志（教授・文化地質学）
		廣川智貴（准教授・ドイツ文学）
	協同研究員	清水洋平（本学非常勤講師・特別研究員）
		大井修吾（本学非常勤講師）
		梅田真樹（京都西山短期大学非常勤講師）

※研究代表者からの申し出により、研究協力員（支援）1 名を解任。

2018（平成 30）年度「一般研究」（新規採択課題）研究目的紹介

共同研究

歴史史料・考古資料活用による次世代作物資源の多様性構築に向けた学際的研究

研究代表者・准教授　武田 和哉
（人文情報学）

本研究は、東アジア食文化で重要な位置を占め、日本と中国の農書など歴史史料に記載が多いアブラナ科作物を研究材料とする。アブラナ科作物は全世界各地で栽培され、東アジアの米主食文化圏では中心的副食である。近年、日本では伝統野菜が注目され、これら品種の保存を通じ、遺伝的多様性の重要度への認識が高まっている。

本研究は、2014 年度に採択された基盤研究（B）（海外学術調査）「アブラナ科植物の伝播・栽培・食文化史に関する領域融合的研究」において得られた成果や知見、さらには国内外の諸機関・団体・個人等との学術交流・信頼関係等の学術的資産を継承しつつ、次世代の農資源利用という課題に資する成果の形成に向けてさらに活動を展開する。

本研究では、公刊されている歴史史料の記述や図像に加えて、地方文書等の在地史料から、品種・栽培技術・栽培環境に関する情報を収集し、過去の品種の形態的特徴や栽培方法を人文学的側面から把握する。また、現品種にどの形質が受け継がれ、どの形質が選抜の過程で失われたかという問題や、現存品種間の交雑、遺伝解析、各作物が持つゲノムが環境、肥培管理から受ける要因を、比較ゲノム等の手法により、農学的・植物学的な理解を行う。最終的に文理融合による解釈から、アブラナ科作物品種の歴史的変化を踏まえた将来の農資源の在り方、多様性を理解することを目的としている。

今後は、まず研究活動の方向性について人文学・農学の双方の研究者による基礎的議論から開始することとし、その方向性を踏まえて 2019 年度以降に国内・国外での調査の計画を立案し実施していく予定である。また、国内外の関係機関等との連携・交流も展開することも計画中である。さらに、国内のアブラナ科の遺伝子サンプルについてはゲノム解析等の農学的研究分析と、古文書や歴史史料調査等の人文学的研究調査を並行して行い、それらの所見等については定期的な総括会議の場で情報共有や様々な見地からの検討を行いつつ、最終的な成果のとりまとめに結び付けていきたいと考えている。

個人研究

農業奉公の歴史社会学的研究 ―労働を通じた社会的包摂に着目して

研究代表者・任期制助教　阿部 友香
（社会学・農村社会学）

本研究は、奉公というローカルな労働慣行とイエの論理の間で、昭和初期の地域社会において、いかにして社会的包摂の実践はなされていたのかを明らかにすることを目的とする。

日本の伝統家族＝イエの研究史において、有賀喜左衛門の提示した「生活保障組織としてのイエ」は、農村社会を理解する上で非常に有効なものである。しかし、イエ（主家）の経営への関心が高かったことから、多様な属性をもつ人々で構成される農村という観点からのイエ・ムラ研究は未だ不十分である。

第二次世界大戦前後は、近代の諸制度が現在の形に再編される時期であり、社会保障制度もまた大きく変化していった時期である。一方で、医療化・施設化の浸透に伴い、現在「障害者」とされる人びとが地域社会から不可視化され、「ケア」の対象となっていった時期でもある。労働慣行のひとつである奉公は、山形県庄内地方の事例より、即戦力の若者が循環する仕組みの一方で、周縁的な人びとの受け皿でもあった。つまり、奉公慣行は福祉が未整備な時代にあっては、農村における周縁的な人びとに対し、生業と地域社会での正当な役割・居場所を与えるものでもあった。

現在「農福連携」として注目される取り組みに本事例は類似した部分をもつが、本研究では福祉的な観点ではなく、イエ・ムラ研究の立場から周縁的な人びとの生業のあり方を考察する。対象地域は若勢慣行が広く見られた山形県庄内地方とし、高齢者の口述データを用いる。中層・下層の人びとの労働・生活実践、特に障害者などの周縁的な人びとと農業奉公慣行とのかかわりに焦点を当て、オーラルヒストリーの記述・分析を行う。

2017（平成 29）年度「一般研究」研究成果概要

共同研究

スティラマティの倶舎論注釈書『真実義』梵文写本第一章の研究

研究代表者・名誉教授　小谷 信千代
（仏教学）

本研究は、ヴァスバンドゥの『倶舎論』に対するインド撰述注釈文献のうち、最も大部にして最も詳細な注釈である、スティラマティ（安慧）の『真実義』サンスクリット写本の解読を目的とする。研究の手順として、研究代表者である小谷がサンスクリットテクストとその試訳を準備したうえで、大谷大学にて定期的に研究会を開催し、研究分担者と共同で検討することを繰り返すというかたちで、解読研究を遂行した。さらに本研究は、各年度に６葉づつの解読を目指す研究計画に基づいて遂行されており、本年度は『倶舎論』冒頭の序偈、及びそれに後続する「アビダルマの定義」に対する注釈箇所の解読を試み、サンスクリットテクストを確定した上で、試訳を完成させた。

またそれらの作業と並行して、ヤショーミトラの『倶舎論釈明瞭義』との異同を丹念に調べ、スティラマティの注釈に見られる独自性を浮き彫りにした。特に、ヴァスバンドゥの本文に対するスティラマティによる文法学的解釈は、パーニニ文法学的見地からも興味深い特徴を示している。

従来の研究において、スティラマティという人物は、ヴァスバンドゥの著作群に対する一注釈家としてのみ捉えられてきた。しかし本研究により、スティラマティ自身の背景の一端が少しずつ明らかなりつつある。具体的には、(1)『順正理論』の文脈を精密に捉えながら、スティラマティが『倶舎論』の注釈書を著した事実を窺い知ることが可能である。(2) またアビダルマ教義学に着目すれば、チベット文のみでは確定困難であった議論の脈絡を丹念に辿り、いくつかの点において議論の展開を明確にすることが可能である。というのもスティラマティによる注釈内容は、インド撰述のいかなる『倶舎論』注釈書より詳しく、より大部だからである。この点はスティラマティの力量を伺い知るに充分であり、『真実義』が最重要の注釈書と目される由縁である。

共同研究

紋章との比較による系譜の図像化規則とその構造分析

研究代表者・教授　柴田 みゆき
（情報処理学）

柴田班の 2017 年度の活動を、現地調査・合同会議・研究成果の公開の３点に分類し、以下に概説する。

(1) 現地調査の活動報告

(1-1) 紋章調査班

2017 年８月 11 日㈮から８月 21 日㈪までの 11 日間の日程で研究代表者（柴田）・研究分担者（三浦）・協同研究員１名（杉山）が、ロンドン６箇所でそれぞれ紋章の現地調査を行った。また、各自で手分けして、ロンドン市内及び近郊の聖堂・墓地・書店等の現地調査を行った。

(1-2) 本邦における系譜系図情報調査班

(1-2-1) 2017 年８月 22 日㈫から８月 25 日㈮までの４日間の日程で協同研究員２名（生田・横澤）が、東京６箇所でそれぞれ円形系図の現地調査を行なった。

(1-2-2) 2017 年９月 20 日㈬、研究代表者・協同研究員５名（松浦・杉山・生田・横澤・平塚）が、清涼寺（京都市）において松浦家の調査を行った。

(3) 合同会議の開催

2017 年９月 19 日㈫、研究班合同会議を京都市内で開催した。参加者は、研究代表者・協同研究員５名（松浦・杉山・生田・横澤・平塚）であった。各自の研究の進捗を報告、今後の方向性を確認した。

(4) 研究成果の公開

(4-1) 2017 年 12 月 16 日㈯、本学人文情報学科主催のワークショップ『人文情報学研究の最前線 2017』において、研究代表者（柴田）が『本邦における紋章研究の諸問題』と題して発表した。

(4-2) 2018 年３月 23 日㈮、国際学会 12th International Conference on Language, Literature, Culture and Education（ICLLCE）2018 において、研究分担者（三浦）が“Illegitimate Sons Around King John : In Analysis of Coats of Arms”と題した発表を行った。

共同研究

アブラナ科植物の伝播・栽培・食文化史に関する領域融合的研究

研究代表者・准教授　武田 和哉
（人文情報学）

本研究は、東アジアの米主食文化では中心的副食として食されてきたアブラナ科植物について、いつ頃から日本列島に伝播・受容され、どのように栽培が広まったのか、またその栽培技法や食文化などの諸問題に関して、農学系・人文学系の研究者の協業により実施するものである。歴史・考古学などの史資料や、品種の遺伝学的背景や成果等を融合させた総合的研究を目指しており、日本国内やアジア各地において、関連する国際条約や国内法等に留意しつつ、各地における栽培形態・食用文化・利用方法や関係技術等を対象に含めた各種の調査を行ってきた。

発足４年目で最終研究年度となった 2017 年度は、成果のとりまとめ作業を重点的に実施した。既に 2016 年度時点において、研究成果物の方向性については研究班内で議論を行い、一部の研究者を対象とした高度な研究書の形態を目指すのではなく、一般市民を対象とした平易で読みやすい内容の学術書としてまとめることで一致を見ていた。この結果を踏まえて、年度の前半には各研究者が分担して原稿執筆を行うとともに、それと並行して出版社側とも協議を行い、出版引受や内容・出版物の規模等条件に関する協議を行った。

年度後半には、各原稿の取りまとめを行い、２月に最後となる研究総括会議を開催して、内容を検討した。その後、研究班内で原稿の読み合わせや補筆作業を経て、年度末には原稿の取りまとめを一通り終えて、研究班活動の締めくくりとした。

以上の諸活動の詳細については下記の如くである。

５月 18 日～20 日
成果物刊行に関する打ち合わせ（東京都千代田区・東北大学大学院生命科学研究科）

９月 22 日～23 日
成果物刊行に関する打ち合わせ（東北大学大学院生命科学研究科）

２月 20 日～22 日
2017 年度研究成果検討総括会議（20 日：宮城県石巻市内、21 日宮城県東松島市および利府町内、22 日東北大学大学院生命科学研究科）

３月 10 日～11 日
成果物刊行に関する打ち合わせおよび史資料調査（東京都千代田区）

なお、研究成果物については、2018 年度末か 2019 年度当初頃に公刊・市販される見込みとなっている。

共同研究

ウェアラブル端末を用いた大学生の学習意欲喚起のための研究

研究代表者・准教授　上田 敏樹
（情報工学）

本研究は、学生が装着したリストバンド型 e-health 端末やスマートフォンから得られたバイタルデータ（心拍数、睡眠データなど）やライフログ（移動距離、ルートなど）と学生の身体状態および学習行動との関係を見出すことを主目的とする。2017 年度は前年度に Shiny サーバ上に実装した、ウェアラブル端末から取得した学生の生体データやライフログを統合的に解析する Web アプリを利用しデータ収集を実施した。数名の学生から協力が得られたものの、１名からのみ数ヶ月に渡る有効なデータを取得することができた。この事例では、毎日の歩数、睡眠時間、移動などのデータを適切なグラフ表示方法による可視化と共有された情報に基づく筆者からの運動継続に対するアドバイスが学生の健康意識のために効果的に働くことが分かった。これは、e-health 端末とスマートフォンを利用した継続的なデータ取得と可視化によるモチベーションの維持効果に加え、他者と情報を共有する仕組みにより学生の動機付けを継続させることができたことになる。今後は、眼鏡型ウェアラブル端末を利用し、授業中における学生の集中度がバイタルデータやライフログとどのような関係を持つかについて研究を進めることとしている。また、研究協力者である学生からのデータ提供については大谷大学の研究倫理規程に基づく個人データ提供に係る同意書を締結した上で、その取扱いを慎重に進めている。

研究成果については次の通り国際学会等で発表した。

1. Assisting Student's Health Consciousness by the use of Wearable Device, 2017 IEEE TENCON Penang, 2017-11-08
2. Cost-Effective Digital Campus with Tablet PC, Educational, 2017 IEEE TENCON Penang, 2017-11-09
3. ウェアラブル、タブレットなど ICT デバイスやオ

ープン e ラーニングを使った経済的な大学教育システム，電気学会（教育フロンティア研究会），2017-12-02
4. Socio-Economics and Educational Case Study with Cost-Effective IoT Campus by the use of Wearable, Tablet, Cloud and Open e-Learning Services, ITU Kaleidoscope 2017 Nanjing, 2017-11-28（Best Paper Award（第２位）受賞）

共同研究

人口減少時代の地方都市・中山間地域の多文化化と地域振興に関する社会学的研究

研究代表者・准教授　徳田 剛
（地域社会学）

本研究は、既存研究であまり取り上げられてこなかった地方在住外国人に着目し、その生活課題や支援団体の活動等について、地域調査の手法で明らかにすることを目指している。2017 年度は、これまでに行ってきた四国地方に加えて、近畿・中国地方の日本海側の２地域での調査に注力した。

2017 年８月には、地方部での多文化共生社会づくりに精力的に取り組んでいる京都府京丹後市と島根県出雲市を訪問し、それぞれのキーパーソンと面談した。京丹後市では、市町村合併により広域化した市域内での外国人住民への相談対応や日本語習得のための機会創出などの課題についてお話を聞くことができた。出雲市では市内の製造業の大工場に勤務する日系ブラジル人の人口が急増し、それへの対応が課題であることが確認できた。これを受けて 2018 年２月には島根県出雲市と雲南市において共同調査を行い、同地域での多文化化対応についての詳細な情報を得ることができた。

また、本研究班では年に２回、愛媛県松山市で一般市民や関係者に公開する形で研究会を実施している。第１回「移住と共生」研究会では大阪経済法科大学・客員研究員の武田里子氏を招へいし、長野県飯田市での多文化共生の地域づくりの現状と課題についてご講演をいただいた。同市では、結婚移住女性を中心としたフィリピン人共同体やリーマンショック後に定住したブラジル人による外国人住民が主体的に関わる形での地域づくりが進められている。第２回「移住と共生」研究会では、四国朝鮮初中級学校の公開授業と学校行事に参加する形でのフィールドスタディを実施した。同校は四国で唯一の民族学校でありそれを支える在日コリアン・コミュニティの規模が小さく運営は厳しいが、子どもたちは父兄や学校の先生方、地域の支援者によって支えられ、元気に勉学に励んでいる。これらの成果をもとに、最終年度にあたる 2018 年度での研究成果の取りまとめを目下進めているところである。

共同研究

モンゴルの世界遺産「大ブルカン・カルドゥン山」に関する学融合的研究

研究代表者・教授　松川 節
（モンゴル学）

本研究は、1)「大ブルカン・カルドゥン山及び周辺の祭祀景観」遺産の研究基盤を構築し、世界遺産富士山との比較研究を行った上で、2）周辺のベレーヴェン寺院・アラシャーンハダ遺蹟の調査・研究と、それらの世界遺産登録のための実効的提言を行い、3）結果としてもたらされる新たな知見に基づき、モンゴル宗教文化史を再構築することをめざすものである。

二年目にあたる今年度は、モンゴル国における①現地調査（８/11～８/15)、②ワークショップの開催（１/８)、③日本における調査（10/27～11/１）を実施した。①はフフノール、ベレーヴェン寺院、アラシャーンハダ遺蹟の現地調査を行い、松川、藤井麻湖、山口欧志、モンゴル側はツォクトバータル、サロールボヤン、スレンハンダ、バトツェツェグ、デムベレル、そして本学大学院のボルマーが参加した。②は「世界遺産『ブルカン・カルドゥンとその周辺の神聖な景観』マネジメントをめぐる諸問題」と題し、モンゴル国環境観光省、教育文化科学スポーツ省、ユネスコ国内委員会、ハン・ヘンティ国立特別保護局行政機関の代表者と、日本側は松川、二神葉子が参加し、世界文化遺産富士山の保存保護マネジメント事例を紹介しつつ、モンゴルの世界遺産の保存保護について意見を交換した。③はモンゴル国よりツォクトバータルとハシマルガドを招聘し、世界遺産富士山及び関連遺蹟を巡検した。

２回の現地調査とワークショップにより、本研究課題のうち、(1）大ブルカン・カルドゥン山及び周辺の祭祀景観が 2015 年にユネスコ世界文化遺産に登録された後、現在に至るまでに行われてきた保存保護・観光マネジメントの現状と課題が共有され、(2）該当地

域の保存保護に向けた法整備とマネジメントプランを、来年度を目途に策定するには、モンゴル側関係機関が相互に密接な関係を構築することが、差し迫った課題であると了解された。

研究代表者の松川は、今年度、モンゴル国に５回にわたって出張し、モンゴル側研究協力者との共同研究を十分に実施し、またウランバートル市にてワークショップを開催し、喫緊の課題について共通認識を得ることができたため、ほぼ計画通りに研究は進展していると言ってよい。その一方、モンゴル人にとっての崇拝の対象となっている大ブルカン・カルドゥン山の調査研究に外国人たる我々が関わっていることについて、モンゴル国において根強い批判的世論が発生しているため、昨年度同様、本研究を慎重に進める必要が生じている。

共同研究

変動帯の文化地質学

研究代表者・教授　鈴木 寿志
（文化地質学）

文化地質学の科研費は、基盤研究（B）として 2017 年度から４年計画で新たな視点で研究を進める運びとなった。真宗総合研究所では、代表者に加えて科研費研究分担者から２名そして研究協力員１名を加えた計４名体制で共同研究を行った。

2017 年度は、まず８月 27 日に地学団体研究会旭川総会にて普及シンポジウム「私たちの生活と大地－文化地質学のススメ－」を開催し、６件のシンポジウム講演と３件のポスター発表を取りまとめた。北海道特有の文化と地質の関わりが議論され、『地球科学』誌に特集を組むことが決まった。また 2018 年３月 10 日には、大谷大学を会場にして「文化地質研究会」が設立された。３月 10 日に設立総会とシンポジウムが開催され、３月 11 日には研究発表会が催された。２日間で８件のシンポジウム講演、12 件の口頭発表、６件のポスター発表がなされた。研究会を立ち上げたことで研究発表の場が広がり、研究成果の公表と情報交換が進むこととなった。次年度に雑誌『地質と文化』を創刊すべく、準備を進めた。

研究代表者の鈴木は、上記のシンポジウムと研究会設立の牽引役を担った。ほか２名の研究員・協同研究員は以下の研究を推進した。

欧州文学と地質学［廣川智貴］：「山」の捉え方について、17 世紀のイギリスでは「美観を損なう不快な突起物」とされていた。それがドイツ語圏では 18 世紀のスイス派の登場により、「崇高」なものへと変化していく。その過程を論じた。

仏教と文化地質学［清水洋平］：初期仏教の伝統を受け継ぐタイの寺院では、布薩を行う「界」を示すために、目印として「結界石」が置かれる。これらが布薩堂の周囲８方向（東西南北とその間）に置かれることは一般的に知られていたが、それ以外に布薩堂の地中にも結界石が置かれる場合があることがわかった。

個人研究

ハンス・リップス解釈学におけるパトスを基盤とした知識教授理論の研究

研究代表者・准教授　田中 潤一
（教育学・教育哲学）

2017 年度は、ハンス・リップス解釈学の理論研究及び教授法への応用研究、さらに他の哲学との比較研究を行った。

解釈学的論理学研究では、前年度「概念論」研究の連続で、「命題論」を考究した。「「語り」からの命題の生成――ハンス・リップスにおけるトーンとロゴス――」（『人間形成論研究』第８号、2018 年３月１日発刊）では、命題が日常的「語り」から生じるプロセスを考察した。日常的な語りは、「問い」によって亀裂が生まれ、命題化される。リップスが伝統的な主語・述語概念を脱し、主語が自己展開することから主語・述語・繋辞が生じる過程を述べた意義を解明した。さらに語りの「トーン」がリップスのロゴス観の根底にあると指摘した。

比較哲学研究では、国際学会で発表を行い（2nd International Conference on Japanese Philosophy 2017 年７月 28 日）、その原稿を元に論文を執筆した。“An Unity of Knowledge and Action-From the Standpoint of Shingon Esoteric Buddhism－”（『教育思想・教授法研究年報』第２号、2018 年３月１日発行）本論文では日本思想、とりわけ密教思想について考察したが、その「知」の意義を省察した。密教の知がすべての活動を包括する地平・場所であり、「信」を重視する西田哲学や、「行」を重視する田辺哲学とは異なる視点をもたらすことを論じた。これまで解釈学において生動的な知が存することを研究してきたが、本論文では見解を踏まえ、知の生動性を論じた。

教授法への応用研究では、国際学会で発表を行った。The study of the role of intuition in the teaching method and teaching materials（Pacific Circle Consortium 41th（環太平洋コンソーシアム　第41回大会）。本発表では「直観」が基になって知識が習得されるプロセスを考察した。教授における直観を新たに定義し、教師・学習者・教材の関係を新たに考察し直した。学習者が「直観」を元に知識を習得するプロセスを考察した。

個人研究

変動期アフリカ系社会における メディアリテラシーと 公共圏の展望

研究代表者・准教授　田中 正隆
（社会学）

不測の政変、テロ、災害、未知の感染症の情報をえるメディアリテラシーが、途上国では問われている。アフリカでは携帯端末が通話のほかに商取引の手段として普及し、人々がラジオ・テレビを受信して、外出先でも放送へアクセスできるようになった。1990年の民主化以降、多くの民営放送局が誕生し、視聴者参加型の番組で市民の声を放送に広く取り入れるようになった。そこにおいて人々が「公共」について語りあう場が生じている。本研究の目的は、グローバル化するアフリカ社会で、メディアがどのように人々の生活に浸透し、その暮らしを構築するかを、ブラジルのアフリカ系社会との比較のもとに明らかにすることだった。

本研究により、民営局に視聴者の参加番組が多く、人々が日々の暮らしで感じる不満を電話で話す番組があると判明した。番組は自由に思うことを話し、社会のデモクラシーを進歩させようと呼びかける。調査では、番組の常連参加者の実態を把握し、彼らの生活史の比較から、アクティヴ・オーディエンスの特質を明らかにした。

代表者はベナンおよびトーゴ南部都市部の放送局調査と視聴者の世論調査を行った。その際に2015年トーゴ大統領選挙と2016年ベナン大統領選挙の前後の世論の情勢と推移を尋ね、元首を投票で選出する「パブリック」な関心事がどのように人々を捉えているかを把握した。分担者のブラジル調査では、サンパウロ、サルヴァドール、リオデジャネイロ、ポルトアレグレにて資料収集した。当時、五輪招致などの国家的行事を梃に社会変動が進んでいる現況を確認しつつ、かつてのブラジル黒人運動の理論母体となった黒人新聞について史料分析を進め、人種とネイションについての言説の歴史的変遷を明らかにした。

以上の知見から、メディアと人々の公共圏に注目することで、アフリカ系社会の変動、とりわけ政治シーンの世代交代と体制転換の可能性をよみとるという、次なる課題を得た。

個人研究

前近代中国黄河中流域における 水利権と水利組織

研究代表者・准教授　井黒 忍
（東洋史学）

本研究の目的は、15～19世紀の中国黄河中流域（陝西省東部・山西省南部・河南省西部）において、1）水利権がいかに認識され、売買・貸借などの契約関係の中でどのように取り扱われたのか、2）民間の水利組織がどのように成立し、水資源の管理・分配および水利権移転にいかなる役割を果たしたのかの２点を明らかにした上で、3）異なる地域間の比較を通して、資源管理システムとしての持続性の差異とそれぞれの歴史的意義を評価することである。

2017年度の研究内容としては、2017年10月26日から10月31日にかけて中国・南開大学において開催された“The Fourth Conference of East Asian Environmental History”に参加し、研究発表“Borders between Self and Others: Spatial Analysis of Local Communities Connected by Water in Shanxi, in Late Imperial China, Based on the Canal Network Maps on Steles”を行った。その内容は、水利用に関わる日中の地図・絵図を比較して、その共通点と相違点を抽出するというものであり、特に大きな違いとして境界線の有無を取り上げ、その違いが意味する村の役割の違いを指摘した。

また、水利権売買に関する研究成果をとりまとめた「近世・近代華北の水利権売買に関する一考察――山西・陝西・河南の事例に基づいて」を執筆し、『歴史科学』229号に掲載された。その内容は、13～19世紀の中国北部（山西省・河南省・陝西省）の事例から、水資源の管理主体と管理方法の変化を明らかにするというものであり、その変化の中から生み出された資源の商品化という問題を取り上げ、国家と地域社会の水利権売買に対する認識と対応を考察した。

さらに、水利社会史に関する研究を綜述した「華北「水と社会」史研究の現状と展望」を執筆し、『中国史学』第 27 巻に掲載された。その内容は、華北の中でも特に多くの研究が集中する山西省中南部と陝西省東部に着目し、水と社会をめぐる歴史研究の近年の成果を整理し、その特徴と傾向を分析するとともに、今後の課題と展望を提示するというものである。

個人研究

口承と文献学の融合に基づくチベット後期中観思想研究

研究代表者・元特別研究員　西沢 史仁
（仏教学・チベット学）

2017 年度は、当科研研究の最終年度に当たるので、三年間の研究成果の取り纏めを行った。具体的な研究活動及びその成果発表は以下の通りである。

チベット古文書研究会では、前年度までに『チャンキャ教義書』中観派章全体（民族出版社本 pp.190-364）を講読し、計画通りその全訳を完成したので、本年度は、同書の思想的背景を解明するために、特に、(1) ツォンカパの『善説真髄』（中観派章）等のゲルク派の中観論書、(2) シェーラプジンパの『二諦精解』、(3) 初期チベット人学者の中観論書の解読とゲルク派の後期中観思想との比較対照作業に専念した。具体的には、同研究会において、前年度に引き続き、『善説真髄』（中観派章）の講読を継続し、その全体（ローリン活字本 pp.84-228）の講読を完了、全訳を完成した。さらに、シェーラプジンパの『二諦精解』の自説の箇所（12 b 1-15 a 3）を講読及び写本研究も平行して行い、冒頭から自説の設定の箇所（1-15 a 3）までの訳出を完了した。同研究会は、真宗総合研究所において、五回（2017/4/24-27；5/16-19；6/5-9；6/26-30；7/24-28）にわたり、集中的に開催した。

初期チベット人学者の中観論書については、特に、ゴク翻訳師の『甘露一滴』、トルンパの『教次第大論』、ギャマルワの『二諦分別論註』、チャパの『中観東方三論提要』、『二諦分別論註』等から中観思想の枢要である《二諦説》の箇所を取り上げ、後代の中観説との比較対照研究を行った。その結果、空性理解に関して、ゴク翻訳師・トルンパ師弟とギャマルワ・チャパ師弟の間に根本的な解釈の相異があり、それぞれが後代のサキャ派とゲルク派の中観説の起源となった可能性があることが判明した。その成果は、第 65 回日本チベット学会学術大会（佛教大学，2017/11/25）において発表し、同学会誌第 64 号（2018）に掲載された。他には、第 18 回国際仏教学会（IABS，トロント大学，2017/8/20-25）に参加して、On the Origin of Non-valid Cognition（apramāṇa/tshad myin gyi blo）という題目で研究発表を行った。

個人研究

北朝鮮の音楽政策に関する研究

研究代表者・任期制助教　森 類臣
（社会学・韓国朝鮮学）

2017 年度は、次のように作業を進行させた。

1. 金正日時代の音楽政策の分析

2016 年度の成果に基づいて、金正日時代の音楽政策の分析を進めた。2016 年度に入手できなかった金正日総書記による著作集や芸術関連の一次資料の収集をさらに進め、金正日時代の主要楽団、特に軽音楽団の事例を研究した。それによって、金正日時代の音楽政策の特徴を整理する作業を進め、同時に金正日時代から金正恩時代への移行について分析した。

2. 金正恩時代の音楽政策の分析

本研究を進めることによって、朝鮮民主主義人民共和国における音楽政策は、その時々の政治文化や実際の政策、そして「時代精神」を強く反映することが分かった。したがって、金正恩時代の政治の重要要素である「社会主義強国」「並進路線」「科学技術第一主義」「自強力第一主義」などを踏まえた上で音楽政策を整理・分析することに努めた。

3. 研究成果

上記の研究成果については、次のようにアウトプットした。

〈学会発表〉

森類臣（2017）「金正恩時代の『音楽政治』に関する考察　――始動・定式化・展開――」（口頭発表、研究フォーラム・北東アジア学会関西地域研究会「朝鮮半島をめぐる国際関係」、於立命館大学）

森類臣（2017）「金正恩時代の「音楽政治」――新楽団創設と回顧音楽会の持つ意味――」（口頭発表、現代韓国朝鮮学会第 18 回研究大会シンポジウム「北朝鮮文化研究の最前線」、於大東文化大学）

〈書籍〉

森類臣（2018）「조선민주주의인민공화국 ‘김정은 시대’의 경음악 노선 ――모란봉악단，청봉악단을 중심으로――（朝鮮民主主義人民共和国の「金正恩時代」

における軽音楽路線――牡丹峰楽団、青峰楽団を中心に――)」『한국학과 조선학, 그 쟁점과 코리아학 1(韓国学と朝鮮学、その争点とコリア学 1)』、pp.361-385、패러다임북(パラダイムブック)※韓国語
〈論文〉
森類臣(2018)「『金正恩時代』の『音楽政治』――牡丹峰楽団を中心に」『現代韓国朝鮮研究』第 18 号、pp.34-52

個人研究

再犯リスク低減と更生の基盤づくりを目指したピアサポート活動の試行的実践とその評価

研究代表者・教授　脇中 洋
(発達心理学・法心理学)

研究助成(科研費基盤研究(C):16K03379)2年目の 2017 年度は以下の活動を行った。9月にヘルシンキおよびオスロの刑務所や更生保護団体を訪問し、施設や団体ごとの共通点や違いについて聞き取り調査を行った。また3月にはカナダ・ヴィクトリア市内の複数の更生保護団体を訪問し、各施設のコンセプトの違いや連携のあり方について詳細に調査した。

国内では、播磨社会復帰促進センターの知的障害や精神障害のある受刑者が収容されている特化ユニットで実施されているクラウニング講座(第 11 クール)に通い、効果検証のための質問紙調査を重ねてデータを収集した。

このほか刑事裁判(現住居住物放火被告事件・10月、強姦被告事件・9月、強盗殺人被告事件・6月)で、知的障害のある被告人や被害者の心理学的鑑定や情状鑑定を行って公判で証言し、罪を犯したり被害者として処遇されたりした知的障害者の入り口支援(取調べから公判まで)に関わることによって、ピアサポーティブな更生保護につながる知見を得た。

さらに国立重度知的障害者総合施設のぞみの園の「福祉の支援を必要とする矯正施設等を退所した知的障害者等の地域生活支援」に関わる研究検討委員として発達障害学会(8月)にて共同発表し、現職者向け研修(2月)で「育ちを剥奪された人」と題した講演・鼎談・研修コーディネーターを務めた。

脇中　洋　2017　ある死体損壊等被告事件の情状鑑定を通して　大谷学報 97. 1-23.
脇中　洋　2018　知的障害のある放火犯に関する心理学的鑑定　人間形成論研究 8. 63-81.
脇中　洋他　2018　矯正施設における知的障害者等を対象としたクラウニング講座の意義　大谷大学真宗総合研究所研究紀要 35. 83-88.
脇中　洋他　2017　矯正施設を退所した知的障害者等の住まいの変遷に関する研究　日本発達障害学会
脇中　洋　2017　司法における供述の取り扱いの諸問題:再考　法と心理学会第 18 回大会
脇中　洋他　2017　取調べ技法とカメラアングルの組み合わせが事実認定に与える影響について　法と心理学会第 18 回大会

個人研究

『苔の衣』諸伝本の本文研究及び校本作成

研究代表者・元特別研究員　関本 真乃
(国文学)

本研究は、『苔の衣』諸伝本に関する書誌・本文調査を実施し、それぞれの本文を精密に比較検討することにより、諸本の関係について従来の通説を見直して分類し、どのような書写・享受過程を経て現存する『苔の衣』諸本の本文が形成されたのかを総合的に明らかにすることを目的とする。

本年度は、金沢大学本(3冊)・盛岡市中央公民館本(4冊)・実践女子大学蔵黒川四冊本・立命館大学図書館本(1冊)の翻字作業を完了した。
また京都市歴史資料館所蔵資料画像データにより、賀茂季鷹蔵『苔ころも』の翻字作業を進め、半分程度完了した。

その結果、金沢大学本は字配り用字とも京都市歴史資料館蔵本ともほぼ一致することが判明した。加えて、三冊はいずれもそれぞれに字の癖が異なり、この点も京都市歴史資料館蔵本とほぼ重なる。更なる検討が必要ではあるが、金沢大学本は、京都市歴史資料館蔵本もしくはその祖本の忠実な写しである可能性が高い。また京都市歴史資料館蔵本は他の本にはない、本の伝来等について記していることも判明した。

この成果を、金沢大学(上巻)の翻刻に、京都市歴史資料館蔵本の本文を対照させ異同を記したものを、「京都大学國文學論叢」39 号に「金沢大学附属図書館蔵『苔の衣』翻刻(一)――京都市歴史資料館蔵『苔の衣』本文対照――」として投稿し、掲載された。中巻・下巻についても同様に掲載される予定である。

翻字作業を終えた B 系統の諸本を、一部分比較検

討したところ、黒川四冊本（及び盛岡本）は、金沢大学本（上中下３冊）・島原文庫本（上下２冊及び秋巻相当１冊）・東大本（秋巻のみ１冊）・神宮文庫本（上下２冊）ら他の諸本と異なる本文を持つ場合が多いという見通しを得た。引き続き、現存する『苔の衣』の最古写本とされる穂久邇文庫本の本文と、諸本を比較検討し、諸本本文の形成過程を考察する予定である。

個人研究

現存大蔵経諸本をもちいた〈阿闍世王経〉漢訳諸本に関する文献学的研究

研究代表者・元任期制助教　宮崎 展昌
（仏教学）

2016 年度に引き続き、2017 年度も国内所蔵の一切経の写本・版本に関する調査と成果発表を継続し、一定の成果を上げることができた。

写本・版本調査に関しては、石山寺一切経について、石山寺綜合調査団のご協力のもと、夏と冬の大調査の折、２回にわたって閲覧・調査することができた。また、座主猊下より特別のご許可をいただき、石山寺綜合調査団団長の奥田勲先生のご尽力もあって、奈良文化財研究所が撮影した画像を利用することができることになった。また、2018 年２月には増上寺の宋版・元版大蔵経の調査・撮影を関係各位のご協力のもとに行うことができた。これらに関する本格的な調査・検討は 2018 年度以降に行う予定である。

研究成果の発表については、５月に国際仏教大学院大学・日本古写経研究所で開催された 2017 年度第１回公開研究会、および８月にカナダ・トロント大学で開催された国際仏教学会（IABS）において研究発表を行った。ともに、竺法護訳『普超三昧経』に関して、これまで調査を行ってきた日本古写一切経と版本大蔵経について、主に異読の共有関係から明らかにできる諸本の系統関係に関して日本語と英語で口頭発表した。また、所属する大谷大学仏教学会の研究例会では、仏典に広く見られる「順忍」という術語に関する研究発表を行なった。『阿闍世王経』チベット語訳からの訳註研究として、第 IV 章および第 XI 章前半部分について、それぞれ雑誌論文のかたちで公表した。

あわせて、今年度は大蔵経の成立および変遷についての概説書（単著）を書き下ろしのかたちでまとめる執筆活動を行なった。大学生・一般を対象とする大蔵経に関する概説書をまとめることは漢訳大蔵経を主たる研究対象とする本プロジェクトとも密接に関わるものであり、アウトリーチ活動にもあたる。当該書籍は順調にいけば 2018 年度中には脱稿し、2019 年度には出版できる予定であり、本プロジェクトの主たる成果のひとつにもなることが見込まれる。

個人研究

ジャイナ教の死生観に関する基礎的研究 －断食死儀礼の規定を中心として－

研究代表者・元特別研究員　堀田 和義
（インド哲学（ジャイナ教）・死生学）

2017 年度は、ジャイナ教文献における断食死儀礼についての記述の解読作業を行った。まずは、断食死儀礼の実践が認められる条件について分析し、災難、飢饉、老齢、不治の病が中核的な条件であり、これら４つは必要に応じて減らされ、最少の場合にはそれらすべてを含む「死期が近付いた時」という表現になることを明らかにした。この分析のもとになった訳注研究は、詳細なクロスリファレンスを付して将来的に公開する予定である。また、ジャイナ教の綱要書 *Tattvārthādhigamasūtra* の注釈文献の記述に基づいて、断食死儀礼を行う者の心理に関する分析も行い、ジャイナ教徒から見た断食死と自死との相違を解明した。

上記の作業と並行して、５種類のシュラーヴァカ・アーチャーラ文献、および、その理論的基礎を考察するための３種類の哲学文献の電子テキストの入力を行った。この検索可能な電子テキストは、インターネット上での公開を予定している。

2017 年度の経過報告としては、９月に花園大学で行われた日本印度学仏教学会において「地水火風は生きているか？――「ジャイナ教＝アニミズム」説の再検討」という題目で、ジャイナ教徒の生命観を再考する報告を行った（発表内容は、2018 年３月発行の『印度学仏教学研究』第 66 巻第２号に論文として投稿）。その他にも、2017 年 11 月には、イギリスの雑誌 *International Journal of Jaina Studies* の第 13 巻第２号に “On Corresponding Sanskrit Words for the Prakrit Term *Posaha*: With Special Reference to Śrāvakācāra Texts” と題する論文を投稿したほか、ジャイナ教在家信者の行動規範を考察するうえで比較が必要となる、ヒンドゥー教の格言詩と聖者伝の訳注も発表した。

個人研究

東南アジアサッカー市場における移民選手の戦略とネットワーク

研究代表者・教授　阿部 利洋
（社会学）

本研究は、近年急速に発展をとげる東南アジアの新興サッカー市場を対象に、そこにおける外国人選手の役割やネットワークに考察を加えることを目的としている。従来、サッカー移民選手を対象とした社会学的研究では、ヨーロッパ市場におけるアフリカ人選手を対象とし、移民の送り出し国と受け入れ国の経済格差とそれに起因する移民選手の否定的環境を批判的に検討するものが多かった。たとえば、グローバルなサッカー・ビジネスにおける南北格差の中で、10代の無名のアフリカ人選手は「生」の状態でヨーロッパのサッカー・アカデミーへ「輸出」され、そこでトレーニングを受け（「加工」され）、一握りのスター選手（「完成品」）は巨額の移籍金とともに「売却」されるが、その段階に至らなかった多くの無名選手は「廃棄」される、といった認識の図式が該当する。

それに対して、本研究は、東南アジアという新興市場を取り上げる点、また、移民選手の能動的なサバイバル戦略と独特のネットワーク構築に焦点をあてようと試みる点で、先行研究とは異なる知見を模索している。

上記の視点にもとづき、今年度はカンボジアとタイで現地調査を行い、主としてアフリカ人選手らから聞き取りを行った。チーム内での他の移民選手とのポジション争い、マジョリティであるカンボジア人／タイ人チームメイトとの関係構築、予期せざるケガの対処、さらには移籍をめぐる交渉などに焦点をあてた。タイでは、外国人選手のリクルート先の「トレンド」が変化していること、カンボジアではクラブ運営その他に日本の働きかけが顕著であることがうかがえる。こうした就労環境の変化のなかで、アフリカ人選手がどのように各リーグ・市場を認識し、またどのように対応しているか、検討した。

［論文］

Abe, T. 2018. African Football Players in Cambodia. In *Migration and Agency in a Globalizing World : Afro-Asian Encounters,* ed. Y. Mine and S. Cornelissen. London : Palgrave Macmillan, pp.231-245.

個人研究

小規模小学校で活用できる体育教材の開発

研究代表者・元准教授　高瀬 淳也
（体育科教育学）

本研究では、小規模小学校の体育授業の改善を目指し、教材及び授業プログラムの提案を目的としている。本年度は、①小規模小学校の実態調査、②小規模小学校の体育授業の教材開発・授業プログラムの作成を中心に行ってきた。①の小規模小学校の実態調査では、北海道Ｔ管内の中学１年生を対象に、６年生時に少人数学級（複式学級）に所属していた群と、普通学級（単式学級）に所属していた群に分け、質問紙による運動有能感、目標指向性、体育授業評価を実施した。その結果、どの項目においても２群に差が認められず、これまで報告されているような少人数のデメリットについては、確認することができなかった。この研究は、日本スポーツ教育学会第36回大会において発表した。②では、５名以下の複式学級を対象にボール運動領域に視点を当てて行ってきた。筆者がこれまで開発してきた実践事例に修正を加え、研究協力校で検討を行った。例えばベースボール型のゲームにおいて、１～２塁間に簡易フェンスを設置したり、ルールを工夫したりすることにより、３名の守備者でもベースカバーや中継プレイなどの連携プレイの学習が可能であることが示唆された。この他、低学年複式学級における宝運び鬼、中学年ネット型ゲームの実践から用具やルールの工夫によって、学習に適した規模の集団が形成できない学級においても、「ボールをもたないときの動き」の授業プログラム作成の知見を得ることができた。

今後、さらに研究対象校を増やし、教材の汎用性を高めていく予定である。

個人研究

インド・チベット論理学相互理解のための基礎資料の構築

研究代表者・教授　福田 洋一
（仏教学）

本研究は、インド仏教論理学の大成者ダルマキールティの第二の主著『プラマーナ・ヴィニシュチャヤ』

に対する、現存するチベット人注釈書８点について、(1) テキストデータを入力し、(2) KWIC 検索サイトを公開し、(3) 本文に織り込まれた詳細な内容見出し（科段）を抽出・整理し、原典の注釈箇所を対応させた科段対照表を作成することを目的とする。これらの注釈の多くは新出資料であり、また文字の判読の困難な草書体で書かれているため利用が進んでいなかった。平成 26～28 年度科研費基盤研究（C）「初期チベット論理学成立史解明のための基礎研究」において、初期チベット論理学の新出写本のテキストの入力を進め、KWIC 検索サイトも構築したが、本研究はその基礎の上に立って、特にインド・チベット論理学双方の研究者が、これら貴重な『プラマーナ・ヴィニシュチャヤ』の注釈書を容易に参照できる資料を提供することを目的とする。

初期チベット論理学は、『プラマーナ・ヴィニシュチャヤ』の研究によって形成された。インドでは『ヴィニシュチャヤ』の注釈は２種類しか残されていないが、チベット人の注釈は、９点が現存している。このうち、６点についてはテキスト入力は終わり、２点については作業途中であるが、平成 30 年度中には入力を完成できる予定である。初期ゲルク派の代表的学僧タルマリンチェンによる注釈はゲルク派の立場を代弁し、カダム派の解釈とやや異質なので、今回の入力候補から外す。

近年、原典である『プラマーナ・ヴィニシュチャヤ』のサンスクリット語テキストが刊行された。本研究では、最終年度に、チベット人の注釈から科段を抽出して原典との対応を調べ、そのうち主要な注釈書について、科段対照表を作成することにしている。

個人研究

世親作『釈軌論』の総合的研究

研究代表者・講師　上野 牧生
（仏教学）

本研究は、５世紀頃のインド文化圏で活動した仏教僧ヴァスバンドゥ（世親）の手になる『釈軌論』の解読研究である。『釈軌論』は全五章から構成される。第１章から第３章は佛陀のことばを「どのように受けとめるべきか」、つまり経典解釈が主題である。第４章はその解釈の対象となる「佛陀のことば」とは何かをめぐり佛説論を問い、そして「佛陀」とはいかなる存在かをめぐり佛身論を問う。第５章は、そうした佛陀のことばを「どのように聴くべきか」という一点に焦点が当てられる。当時・当地の佛教出家者であれば誰もが知悉していたであろう著名な経文・経句を例に挙げながら、世親はそのひとつひとつを丁寧かつ明快に解釈する。総じて、『釈軌論』は初学者から専門家までを対象とした佛教概論の様相を呈する。

本研究の研究計画は五カ年であり、本年度はその初年度に当たる。研究の最終目標は、チベット訳テクストの批判的校訂と、その全訳注の完成である。現在のところ、第１、２、４章については一定程度作業が完了したが、第３、５章については完了していない。そのため本年度は、第５章から着手した。

第５章では、「説法者」（dharmakathika）の予備軍に向け、「居眠りをしたり他のことに気をとられていたり、怠惰な聴衆をどのように佛法の聴聞に惹きつけるか」という、説法者特有の問題意識に引きつけながら、「そもそも我々は佛陀のことばをどのように聴くべきか」という課題が論じられる。この課題に対して世親が提示する視座は、佛陀のことばを「敬って聴くこと」（gus par nyan pa）、つまり「敬聴」というものである。この術語は世親自身が引用する『広義法門経』（*Arthavistara*）に由来するが、世親によれば、佛陀のことばを聴きたいと願うよう我々を導くのは、佛陀および佛陀のことばに対する「敬意」である。つまり、ただ漫然と聴くのではなく、「敬聴」という態度・姿勢が、佛教を学修する上での重要な契機として強調されるのである。

個人研究

「黒ノート」に依拠したハイデッガーのナチズム問題の再検討
ーメタポリティークを軸にー

研究代表者・特別研究員　田鍋 良臣
（宗教哲学）

本研究の目的は、ハイデッガーのナチズムとの思想的なかかわりを、「黒ノート」に記された「メタポリティーク」という政治－哲学的な構想の分析を軸に再検討することである。2017 年度ではまず、1930 年代前半の「黒ノート」や同時期の講義、講演にもとづき、メタポリティークの内実を整理・分析することで、総長期（1933-34 年）のハイデッガーがナチズムに接近した哲学的な背景を解明することに取り組んだ。研究の結果、メタポリティークは「哲学の再始源化」という試みに依拠して構想されており、ハイデッ

ガーはナチズム革命にこの再始源化の歴史的な好機を見ているが、そこにはまた、ナチズムの人種主義に対する哲学的な批判も含まれていることが明らかになった（田鍋良臣「ハイデッガーのメタポリティーク構想――「再始源化」をめぐって」日本倫理学会第68回大会、2017年11月、於弘前大学；田鍋良臣「ハイデッガー・ナチズム問題再考――メタポリティークの視点から」『大谷學報』第97巻第2号、2018年3月、39-57頁）。さらに、1930年代後半以降ハイデッガーがナチズムから離反していく思想的背景の一つとして想定される、ユダヤ－キリスト教批判、とりわけその唯一神（一神論）をめぐる批判的な言説の内実を「計算的思惟」の観点から検討した。その結果、「創造」や「救済」、あるいは「唯一性」といった唯一神の性格のうちに、ハイデッガーが計算的思惟の働きを見ており、それをいわゆる存在史的な視座から批判していることが明らかになった（田鍋良臣「ハイデッガー「黒ノート」における唯一神批判について」日本宗教学会第76回学術大会、2017年9月、於東京大学）。計算的思惟に対するこうした見解は、ナチズム批判、および現在物議を醸しているユダヤ批判と共通するものである。今後は、この点に留意しつつ、これらの批判が相互にどのような関係にあるのかを追究していく。

個人研究

19世紀フランス詩における宗教的混淆 －教育から文学創造へ－

研究代表者・任期制助教　塚島 真実
（フランス文学）

本研究は、高踏派からランボーにいたる作品に内在するヘレニズムとキリスト教の混淆を明らかにすることを目的としている。

2017年度は、高踏派の代表的詩人バンヴィルについてのフランスにおける研究の進展を踏まえた上で、新たな間テクストの発見を基に、バンヴィルとランボーにおける詩人像の本質的差異を明らかにした。

19世紀前半にロマン派の詩人たちが謳った、使徒やギリシア・ローマ神話の神といった神的・超人的形象に擬えた詩人像は、世紀後半になっても途絶えることはなかった。その一方で、19世紀中葉から後半に先鋭化した「芸術家対ブルジョワ」という構図において、道化が主要な詩人像の一つに浮上してきた。この道化という詩人像を、伝統的に最も神に近い文学ジャンルを自負してきた詩における極めて時代的な特徴の現れと考え、宗教的・神話的形象に範をとった詩人像をよりよく理解するための布石として研究の中心に据えた。

バンヴィルにおける、見物客を高みから睥睨しながら天上へ消える道化は、超絶技巧によってブルジョワを隔絶し誇り高い精神性を保持する芸術家を表している。しかし詩人を芸術家と捉えないランボーは、「見者」という独自の詩人像を描き出す。ランボーにおいて詩人とは、作品を創る者とその享受者、啓蒙する詩人と啓蒙される民衆という上下関係を突き崩すような暴力的な衝動を「すべての感覚の錯乱」によって意図的に生み出し、その衝動を言語化して伝えられる者とされる。ランボーにおける道化の表象が、「芸術家対ブルジョワ」という社会的な対立構造を排除し超人的な身体の動きそのものに集中していることから、彼の詩学に通底する身体の重要性が初期詩篇においてすでに見出されるのである。こうした研究成果の一部を学会で発表し、論文は査読を経て学会誌に掲載された。

個人研究

東南アジア大陸部で発展した積徳行文献の体系解明

研究代表者・特別研究員　清水 洋平
（仏教学・南伝仏教）

本研究の目的は、16～19世紀の東南アジア大陸部：特にタイで発展し、独自に編纂された積徳行という宗教的実践を勧奨する文献：アーニサンサを考察し、①ほとんど知られていなかった同文献群の全体像を把握すると共に、②伝統的パーリ仏典（正典としてのパーリ三蔵及びその註釈文献）と対比・校合しアーニサンサ文献のパーリ仏典史上における変遷・発展の体系的解明をおこなう。

（1）本年度は、①の作業を中心に実施した。具体的には、従前の科研プロジェクト「タイ国を中心とする東南アジア撰述仏教説話写本の研究」を承け、その過程で作成したタイ国中部地域の寺院が所蔵する貝葉写本の所在目録と収集済みのデジタル画像資料を活用し、先ずは「アーニサンサ」（積徳行）文献グループ（約35種230束：1束は約24葉）についての整理をおこなった。この作業を通じて、文献の全体的な系統を把握し、本研究を進める上での基礎となるアーニサンサ文献データベースを構築した。次に、そのデータ

ベースを活用して、特にタイ仏教の特徴的な現実相との対応が明らかな本研究に適する代表テクストを幾つか選定した。そのうちの一つについてクメール文字からローマ字に転写する作業に着手した。

（2）エディション作成等、代表として選定したテクストの精緻な文献研究をおこなうためには、手持ち資料の充実を図ることが必要不可欠である。よって、2018 年３月にタイ国立図書館所蔵資料を中心に、バンコクにおいて関連資料の調査を実施した。

（3）これらの作業に加え、本年度は、８月にカナダ：トロント大学で開催された国際仏教学会（XVII-Ith Congress of the International Association of Buddhist Studies: IABS）において、当該研究の現在までの研究成果を交えた発表をおこなった。

個人研究

『甚深伝』校訂と解釈による ミラレーパの仏教思想の解明

研究代表者・特別研究員　渡邊 温子
（仏教学・チベット学）

本研究の最終的な目的は、ミラレーパの仏教思想を再構築し、彼の思想を解明することである。それにより、チベット仏教後伝期における仏教開花についての基盤研究を提供する。上記の目的を達成するために、現存する諸ミラレーパ伝の原型である『甚深伝』を研究対象とし、現在入手・閲覧可能な写本を用いて①校訂本の作成、および②翻訳研究を通じた文献分析により新たな研究モデルを構築する。

①校訂本の作成に向けて、北京で出版された活字本『甚深伝』を底本として、テキストの入力作業を行った。作業はチベットからの留学生に委託し、半分程度まで入力が完成した。データ入力後、確認作業も合わせて進めたため、当初の予定よりも入力の進捗が遅れてはいるが、その分丁寧に入力作業を行なっている。②『甚深伝』は前半の伝記部分と後半の宗教歌の二部で構成されているが、そのうちまず伝記部分の翻訳が終了した。意味を確定することが難しい部分については、チベット・日本のチベット学研究者に確認し、正確に翻訳を行うように務めた。宗教歌の部分は、第３章まで下訳の作業が終了した。

情報交換を行うために、９月にアメリカの BDRC（Buddist Digital Resource Center）を訪れた際に、新たな『甚深伝』写本の情報を入手し、資料の提供を受けた。オックスフォード大学の写本については、現在図書館と調整を進めている途中である。

個人研究

認知症患者との「関係性」についての新モデルの構築と展開 ー「主体」論を超えてー

研究代表者・特別研究員　翁 和美
（社会学・文化人類学）

本研究は、インタビューを交えた参与観察を通じて、「主体」論として展開されてきた従来の介護論から「相互了解世界アプローチ」へと認知症患者に対する介護モデルを刷新する道筋を示すことを目的としている。従来の介護論とは、専門家「主体」の介護論とそれを乗り越えるように登場した患者「主体」の「新しい介護」論を指す。

研究代表者は「相互了解世界アプローチ」を A 介護施設（仮名）で見出したが、従来の介護とは異なるその実践の特質は A 介護施設がある社会では正しく理解されず、正当に評価されてはいない。そこで、研究代表者は、「相互了解世界アプローチ」と思われる実践が高く評価されている B 介護施設（仮名）と B 介護施設がある社会で、2018 年９月にパイロット調査を行なった。まず、B 介護施設の現在の経営にも関わる創設者の一人から B 介護施設創設の経緯やその取り組みが高く評価されるようになった当時の様子などを聞かせてもらった。また、B 介護施設の実践を知るために、許可が得られた B 施設内のパブリック・スペースで調査することができた。

パイロット調査を通じて、ユニット・ケアと回想法と過去の環境の再現が A 介護施設と B 介護施設の共通する実践として確認できた。一方、主に以下の５点が相違点として見えてきた。1）A 介護施設がある社会と B 介護施設がある社会は、表面的には非常に似た介護制度を持ちながら、介護認定や施設の割り当て方は異なっていた。2）A 介護施設の創設者と違って、研究代表者がインタビューした B 介護施設の創設者は家族介護がベストであると考えていた。3）A 介護施設では、医療従事者と介護従事者の間に介護に向き合う心構えや立場に大きな違いがなかったのに対して、B 介護施設では大きな違いが見られた。4）A 介護施設と違い、B 介護施設の運営は地域住民であるボランティアの支援により実現されていた。5）A 介護施設と違い、B 介護施設では出入りが厳格にコントロールされていた。

今後は、当該社会におけるコミュニティーのとらえ方に注目して研究を進める予定である。

個人研究（本研究）

省察的実践者としての福祉専門職像の再構築に関する臨床研究

研究代表者・講師　大原 ゆい
（社会学）

本研究では、ドナルド・ショーンの提起する「省察的実践者」という専門家像を手がかりに、地域福祉実践に取り組む実践者を福祉専門家として位置づけ、その支援スタイルを明らかにした。省察的実践者は、医師や弁護士など既存の知識と技術に裏付けられた技術的合理性に基づく「技術的熟達者」に対置される専門家像で、その実践は、①状況との対話、②行為の中の省察、③行為についての省察という行為の特徴を有する。このような省察的実践者の概要について先行研究をもとに整理した上で、家族介護者支援やひきこもりの問題など、従来の福祉が政策対象としてこなかったような「今日的な福祉問題」に取り組む実践者らを対象にインタビュー調査を行った。また、福祉専門家養成教育の現状と課題を把握するために、福祉専門家を目指す学生が養成過程で作成する実習記録を解析対象としたテキストマイニングによるデータ分析を行った。このような実践と教育の現場双方の実態を踏まえた上で、省察的実践者としての福祉専門家がどのような問題状況を対象とするのか、またどのような社会資源を用いて実践に取り組むのか、さらに従来の支援スタイルとの相違点やその教育手法として求められることについて考察した。

本研究を通して、技術的熟達者が、均一化・標準化した合理的な技術として問題解決の方法や専門性を捉え、問題を抱える当事者に既存の社会資源を〈あてはめる支援〉を行うのに対し、省察的実践者は、支援者と当事者や状況とのやり取り（状況との対話）、支援者としての自己の行為の振り返り（行為の中の省察、行為についての省察）の過程に支援方法や専門性は存在するとし、一貫して当事者の状況に〈よりそう支援〉に取り組む。そして、彼らは、必要に応じて社会資源を作り出し、さらには社会変革をも視野に入れた実践の展開を目指す専門家であるということがわかった。

個人研究（予備研究）

「世界文学研究」の方法論構築 ーサン=テグジュペリ『星の王子さま』研究を通じてー

研究代表者・准教授　藤田 義孝
（フランス文学）

研究の最終目的は、アントワーヌ・ド・サン=テグジュペリの『星の王子さま』（1943）を適正に評価するため、文学作品が「世界文学」に至る過程を明らかにし、「世界文学研究」の理論的枠組を構築することである。そのため、まず予備研究においては「『星の王子さま』が「世界文学」となりえたのは英語版が英語圏文学市場において成功したからである」という仮説を検証するべく、『星の王子さま』の受容研究にあたった。具体的には、パリのフランス国立図書館（BnF）で『星の王子さま』出版以降の英語とフランス語の書評や新聞記事、評論等を調査した。

その結果分かったのは、当時の書評等を見る限り、『星の王子さま』の世界的成功を予期させる要素は見当たらず、むしろ『人間の大地』（1939）のアメリカ版である『風と砂と星と』の大成功によって既に確立されたサン=テグジュペリの知名度こそが童話作品を有名にしたということである。そこで、主に「飛行文学」としてアメリカに受容されていたサン=テグジュペリ作品という観点から改めて研究を行い、その成果を日本英文学会のシンポジウムで発表した。

予備研究で明らかになったのは、『風と砂と星と』の大成功があったからこそ『星の王子さま』が世界文学として成功した可能性が高いということである。したがって、今後の研究は、アメリカを中心とした英語圏における『風と砂と星と』の受容をテーマとすることになるだろう。

海外学会参加・研究調査報告

第 16 回ヨーロッパ宗教学会年次大会に参加して

国際仏教研究　研究代表者・教授　Robert F. Rhodes

2018 年６月 17 日から 21 日のあいだ、スイスのベルン大学で開催された第 16 回ヨーロッパ宗教学会年次大会（16th Annual Conference of the European Association for the Study of Religions）に参加し、パネル発表をする機会を得た。この学会を主宰したヨーロッパ宗教学会（以下 EAHR と略称）はヨーロッパ最大級の宗教学に関する学会である。今回の大会は 40 以上の国から 600 人近くの参加者を得て開催されたが、５日間のあいだに６の基調講演に加えて 56 のパネルに分かれた 500 以上の研究発表が行われた。パネルの内容は幅広く、古代ギリシャ・ローマの宗教からヨーロッパにおけるイスラムの現状や宗教教育の実践報告までが含まれていた。このように日本ではあまり取り上げられることがないテーマについての研究発表が多く、とても刺激的な学会であった。今回の学会テーマは「複数の宗教的アイデンティティー」（Multiple Religious Identities）であったが、世界の宗教の歴史を見渡すと、一つの宗教に属することは一神教ではあたりまえのことであるが、古代ヨーロッパや欧米以外の各地域では複数の宗教に属することは珍しいことではないという反省に基づいて、このテーマが掲げられたようである。実に宗教の定義について再検討を迫る重要なテーマであった。

今回の学会では、マイケル・パイ国際仏教研究嘱託研究員・マールブルク大学名誉教授が組織した「日本における複数の宗教的アイデンティティー」（Multiple Religious Identities in Japan）と題されたダブル・パネルで発表することができた。このパネルでは、神仏習合にスポットを当て、日本の古代から中世に亘る仏教と神道の交流・融合について８の発表が行われた。前半の４発表は６月 18 日の 9 : 00-10 : 30 の時間帯で、後半の４発表は同日の 13 : 30-15 : 00 のあいだで行われた。発表者と発表タイトルを記すと次の通りである。

1. Michael Pye（マイケル・パイ）、University of Marburg/Otani University（マールブルク大学・大谷大学）
   Exclusivism and Tolerance among Religious Orientations in Japan（日本における宗教的所属意識の排他性と寛容性）
2. 岩沢知子、麗澤大学
   Buddhist Elements at Suwa Shrine in Medieval Times（中世諏訪大社における仏教的要素）
3. D. Max Moerman（D. マックス・モアマン）、Columbia University（コロンビア大学）
   Underground Buddhism : The Subterranean Landscape of the Ise Shrines（地下仏教――伊勢神宮の地下風景）
4. Elizabeth Read Kenney（エリザベス・リード・ケニー）、関西外国語大学
   Buddhism and Shinto in the Life of Yoshida Bonshun（1553-1632）（吉田梵舜［1553-1632］の生涯における仏教と神道）
5. Vladlena Fedianina（ウラデレナ・フェディアニナ）、Moscow City University（モスクワ市立大学）
   The Conception of Deities（*kami*）in Writings of the Tendai Monk Jien（天台僧慈円の論書に見られる神の概念）
6. Robert F. Rhodes（ロバート　F. ローズ）、大谷大学
   Why does Shin Buddhism Reject the Worship of Shintō Kami?（真宗は何故神道の神々を信仰しないのか）
7. Markus Ruesch（マルカス・リュッシュ）、Free University of Berlin（ベルリン自由大学）
   A Shintō Shrine in a Shin Buddhist Temple（ある真宗寺院における神社）
8. Katja Triplett（カッチャ・トリプレット）、Leipzig University（ライプツィヒ大学）
   Response to Presentations on Multiple Religious Identities in Japan（日本における複数の宗教的アイデンティティーについての応答）

このパネルでは、パイ教授が最初にパネル全体の目的と概要を説明し、最後にトリプレット教授が発表を受けて総括を行うというという形式で進められた。岩沢教授は中世諏訪大社における神仏習合について発表し、モアマン教授は同様に中世の伊勢神宮における仏

教の影響について論じた。ケニー教授は吉田神道の流れを汲みながら仏教の僧侶として活躍した吉田梵舜の生涯における神道的要素と仏教的要素について考察し、フェディアニナ教授は親鸞の師であり、天台座主を四回務めた慈円に見られる神道の影響について論じた。最後に私とリュッシュ氏の発表は、それぞれ視点は異なっていたが、真宗と神道（神祇信仰）との関連性について考察した。これらの発表は、他の学会で発表された神道関係の論文とともに、パイ先生の編集による一冊の学術研究書として出版する予定である。

パネル参加者。左からパイ・岩沢・トリプレット・モアマン・フェディアニナ・ケニー・リュッシュ・ローズ

エトヴェシ・ロラーンド大学（ブダペスト）における国際シンポジウム報告

国際仏教研究　研究代表者・教授　Robert F. Rhodes
国際仏教研究　特別招聘者・講師　藤元 雅文

2018年9月17日から18日の2日間、ブダペスト（ハンガリー）のエトヴェシ・ロラーンド大学（ELTE）において、ELTE仏教研究センター・東アジア研究所と大谷大学真宗総合研究所共催の国際シンポジウム“Buddhism in Practice”が開催された。ELTEと大谷大学との共催国際シンポジウムは、2013年ELTEにて初めて開催され、2回目は2016年大谷大学にて開かれ、今回が第3回目となる。

出発当時は台風21号のため関西空港は閉鎖されていて、急遽中部国際空港からヨーロッパに向かうことになったが、ヘルシンキでの乗り継ぎも何とか間に合い、無事ブダペストに到着することができた。

シンポジウム初日（17日）は、午前10時からハマル・イムレ教授（ELTE・国際交流担当副学長）の司会で、開会式が行われた。木越康教授（大谷大学・学長）のシンポジウム開催にあたっての挨拶から始まり、続いて藤井教公教授（国際仏教学大学院大学・学長）のご挨拶、更にハマル・イムレ教授からの歓迎の言葉が述べられた。

開会式に引き続きシンポジウムが開始され、2日間でインド、中国、チベット、モンゴル、日本における仏教に関して、6セッションに分かれて17の研究発表が以下の通り行われた（発表はすべて英語で行われた）。

セッション1（9月17日、10:30-12:00）

1. 木越康教授（大谷大学・学長）
“Recent Trends Concerning the Issue of ‘Buddhism and Practice’ in Contemporary Japan”（「〈仏教と実践〉を巡る現代日本の動向））
2. RUZSA Ferenc 教授（ELTE）
“Why was Original Buddhism for Monks Only?”（「初期仏教はなぜ僧侶のみの宗教であったのか」）
3. 井上尚実教授（大谷大学）
“Problems in ’Transfer of Merit’ as Buddhist Practice”（「仏教の行としての「回向」についての諸問題」）

セッション2（9月17日、14:00-15:30）

4. Robert RHODES 教授（大谷大学）
“Can Arhats attain Buddhahood? An Issue in the Interpretation of the *Lotus Sūtra*”（「阿羅漢は成仏できるか　－法華経解釈の一課題－」）
5. HAMAR Imre 教授（ELTE, Vice Rector for International Affairs）
“Samantabhadra Practice in the *Avataṃsaka-sūtra*”（「華厳経における普賢行」）
6. Michael CONWAY 講師（大谷大学）
“Practice and Other Power in Daochuo‘s Pure Land Buddhism”（「道綽浄土教における行と他力」）

セッション3（9月17日、15:50-16:50）

7. BIRTALAN Ágnes 教授（ELTE）

“Ritual Practices in the Mongolian Buddhicised Folk Religion（Fieldwork Based Research）”（「モンゴルの仏教化された民間信仰の儀礼　――フィールドワークに基づいた研究――」）

8. Jakub Zamorski 教授（Jagiellonian University, Poland）

“Practice（行）and Understanding（解）in Modern Chinese Pure Land Buddhism”（「中国近代浄土教における行と解」）

セッション４（９月 18 日、10：30-12：00）

9. HIDAS Gergely 教授（ERC Synergy Researcher）

“South Asian Nāga Rituals”（「南アジアにおけるナーガの儀礼」）

10. 上野牧生講師（大谷大学）

“On the Listening to Buddha’s Words with Reverence：The Very First Step of Buddhist Practice in Vasubandhu’s *Vyākhyāyukti*”（「仏陀のことばを敬聴すること――世親の『釈軌論』における仏教の実践の第一歩」）

11. SZEGEDI Mónika（PhD Candidate ELTE）

“Abhidharma as Meditation”（「瞑想としてのアビダルマ」）

セッション５（９月 18 日、14：00-15：30）

12. KISS Mónika 教授（ELTE）

“Heian Period Developments in Japanese Esoteric Buddhist Practice”（「平安時代における密教実践法の展開」）

13. 藤井教公教授（国際仏教学大学院大学・学長）

“On the Meaning of the Chanting Practice in Nichiren Buddhism”（「日蓮仏教における唱題の意義」）

14. 藤元雅文講師（大谷大学）

“Shinran’s ‘Practice’：The Shin Buddhist Shift in the Buddhist Understanding of Practice”（「親鸞における「行」－行理解における真宗的転回－」）

セッション６（９月 18 日、15：50-16：50）

15. TÓTH Erzsébet（Head of the Major of Tibetology ELTE）

“Training in the Perfection of Patience in Tsong-kha-pa’s *The Great Treatise on the Stages of the Path to Enlightenment*”（「ツォンカパの『菩提道次第大論』における忍辱波羅蜜の学習について」）

16. “The Three Trainings of Persons of Medium Capacity in Tsong-kha-pa’s *The Great Treatise on the Stages of the Path to Enlightenment*”（「ツォンカパの『菩提道次第大論』における中品の行者の三学について」）

17. OROSZ Gergely（ELTE, Budapest Center for Buddhist Studies）

“Ransoming the Bad Karma：On the Buddhist Component for the Tibetan Ransom（*mdos glud*）Rituals”（「悪業の身代金――チベットの身代金［*mdos glud*］儀礼における仏教的要素」）

発表後には両日とも ELTE のキャンパスに隣接する XO レストランにて懇親会が開催され、発表者が和やかな雰囲気の中で親睦を深める機会となった。二日目の最後にはシンポジウムの閉会式があり、井上尚実教授（大谷大学・副学長）から印象に残った研究内容やシンポジウム開催にあたって尽力いただいた ELTE の先生方への謝辞が述べられ、最後にハマル・イムレ教授によるシンポジウムの意義と成果を総括する閉会の挨拶をもって閉じられた。最後に ELTE・仏教研究センター学術顧問の山地征典博士には、ハンガリー到着から帰国まで、甚深なるご配慮をいただいた。心から謝意を申しあげたい。

以上がシンポジウムの概要であるが、学会に参加した藤元雅文講師の感想を付け加えて報告を終えることとする。

今回、私は国際シンポジウムという場で親鸞の行理解について発表する機会をいただいた。発表後の質疑において親鸞の「名号」についての解釈は文法的に成り立ちうるのかという趣旨の質問があった。その場では、親鸞の思想的意義を伝える応答が十分にできず大きな課題が残るものとなったが、一方で親鸞思想の意義やその根拠をどのように他分野の研究者、もっと言えば他文化・他宗教の方たちに伝え対話していくことができるのかという課題を肌身で感じることができた。このことは、今回のシンポジウムに参加したからこそ得ることができた課題であり成果であると感じている。このような機会をいただき改めて感謝申しあげたい。

開会式での挨拶。左から藤井学長、ハマル副学長、木越学長

モンゴル国立大学との共同調査報告

西蔵文献研究　研究員・教授　松川 節

モンゴル国立大学総合科学部との学術交流協定に基づく共同研究「モンゴルにおける仏教の後期発展期（13～17 世紀）の仏教寺院の考古学・歴史学・宗教学的研究」を推進するに当たって、2018 年８月 18 日～25 日にモンゴル国にて現地調査をおこなった。参加者は日本側が松川と嘱託研究員の山口欧志の計２名、モンゴル側が U. エルデネバト（モンゴル国立大学総合科学部人類・考古学科教授）の１名であった。

８月 20 日㈪：08：00、松川と山口はジープ１台でウランバートル市を出発し、14：30、360 キロ走行してハラホリン市に到着。カラコルム博物館にてエルデネバト教授と合流した。カラコルム博物館では、新任の Lh. シネバト館長を表敬訪問し、旧知の B. デジドマー研究員と研究交流を行った。15：30、カラコルム遺跡を視察。17：00、市南郊のメルヒー丘に登り、ドローンにてカラコルム遺跡の空撮を行った。18：30、アルハンガイ県ホトント郡のモンゴル・ドイツ調査隊のキャンプに移動し、宿泊した。（ホトント郡泊）

８月 21 日㈫：08：30、ハルバルガス遺跡にてモンゴル・ドイツ調査隊の発掘を見学。巨大な構造を有する井戸が出土しており、井戸の中から全長 30 センチほどの鐘が見つかったという。09：00、出発。10：30、アルハンガイ県ツェツェルレグ市着。県立博物館（ザイーン・フレー寺院）を訪問し、中庭に設置されているブガト碑文を検分し、３D 撮影を行う。14：00、ツェツェルレグ市を出てイフ・タミル郡に向かう。14：30、タイハル岩遺跡着。この巨岩には、７世紀～現在に至るまで、様々な文字・言語による題記が残されている。ドローンを飛ばして空撮を行う。18：10、ツェツェルレグ市に戻った。（ツェツェルレグ市泊）

８月 22 日㈬：08：30、ホテルを出て、市内の仏教寺院を見学。09：00、ツェツェルレグ市を出る。09：51、ツェンヘル郡にて舗装道路を外れて北進し、バトツェンゲル郡に向かう。11：13、バトツェンゲル郡にて昼食。タミル河を渡る。14：34、ウルズィート郡を通過。15：00、オルホン河を渡る。16：40、モゴド郡着。新築の保養所に部屋を確保し、フイス・トルゴイ遺跡に向かう。17：40、フイス・トルゴイ遺跡着。ドローンを飛ばして景観撮影。19：50、調査を完了し、モゴド郡に帰還。保養所に投宿した。（モゴド郡泊）

８月 23 日㈭：09：00、モゴド郡に居住するエルデネバト教授の知人バーサン氏宅を訪問。11：00、ルハムバ・ダムディンスレン氏（90 歳）と面会。1970 年代半ばにフイス・トルゴイ碑文を現地からウランバートルに移管した際に、ダムディンスレン氏はモゴド郡の副郡長であったという。当時の事情について聞き取りを行った。12：30、モゴド郡を出発し、ホル・アスガド碑文遺跡へ。途中 14：45、牧民のゲルにて乳製品をごちそうになる。16：30、ホル・アスガド遺跡にて調査。17：15、出発。22：30、ウランバートル市に帰着した。（ウランバートル市泊）

８月 24 日㈮：09：15、大谷大学文学部の箕浦暁雄・准教授、龍谷大学文学部の村岡倫・教授と合流し、モンゴル国立大学講師のデムベレル氏の出迎えでホテルを出発し、市内のモンゴル科学アカデミー歴史考古研究所へ。10：00、研究所付設博物館。ここに所蔵されるフイス・トルゴイ碑文の閲覧の許可を得ていたが、博物館の開錠に手間取り、11：00、閲覧・３D 撮影を開始する（写真参照）。14：30、再びデムベレル氏の車で文化中央宮殿のモンゴル科学アカデミー本部へ。山口氏は国立文化遺産センターにて、文化財保存修復について研究打ち合わせ。松川と村岡教授は、国際遊牧文明研究所の A. オチル教授と面会し、研究打ち合わせ。16：30、松川はモンゴル国立大学を訪問し、哲学・宗教学科研究室にて M. ガントヤー教授と面会し、私立大学研究ブランディング事業の国外評価委員としてのコメントを録画する。17：00、P. デルゲルジャルガル副学部長室にて、ガントヤー教授とともに共同研究の総括と今後の方向性について協議。18：00、大学近辺のレストランにて懇親会。20：00、帰宿した。（ウランバートル市泊）

フイス・トルゴイ碑文の３D 撮像（山口氏）

世界地域開発会議（World community development conference 2018）に参加して

一般研究（中野班）研究代表者・准教授　中野 加奈子

2018 年６月 25 日～27 日にアイルランドのメイヌース大学において開催された世界地域開発会議（World community development conference 2018）に参加した。この国際会議は、地域福祉・地域開発に関わるソーシャルワーカー、市民、研究者が活動成果や理論的課題を議論し合う場である。イギリス、アメリカだけなく、アフリカ諸国や、香港や韓国といったアジアからもたくさんの参加者が集っていた。

24 日は事前プログラムとして、本会議の趣旨説明や、アイルランド・北アイルランドの歴史や文化、社会情勢（フェミニズム運動や移民情勢など）についてのシンポジウムが開催された。

25 日は本会議の第一日目であった。始めに大会長として国連人種差別撤廃委員会の委員長を務めるアナスタシア・クリックリー氏によるスピーチがあり、改めて本会議の趣旨説明がなされた。続いて、アイルランド初の女性大統領として活躍したメアリー・ロビンソン氏から、気候変動による地域問題など、地域開発に関連する話題についてのスピーチがあった。スピーチの後には、フロア発言も活発になされ、双方向での議論が進められた。

26 日～27 日は、「地域開発・ヨーロッパの挑戦とアイルランド問題」「気候の公平性と維持可能な開発」「コミュニティワークと女性の権利」など地域と関連する多様なテーマについての分科会が開催された。

中野は、本学社会学部の志藤修史教授、岡部茜講師との３人のチームで参加した。我々のチームは 26 日の分科会「世界のコミュニティワーク」という分科会で「日本におけるコミュニティワークの実践課題」と題して口頭報告を行った。報告では、地方の過疎化・都市部の過密化を背景に、産業構造の変化や所得格差が生じ、地方・都市部の双方で社会的孤立に陥る人々が存在する状況について説明した。さらに、「我が事・丸ごと地域共生社会」として、市民がそれぞれに役割を持ち相互扶助を行うという社会保障政策の考え方が政府により提案される中で、社会的孤立の解消に対する地域住民のボランタリーな活動に大きな期待が寄せられること、それにより見守り体勢が整う一方で、見守りが監視に移行してしまう危険性があることなどを解説した。

本報告を通して感じたのは、日本の地域福祉や多様なソーシャルワークは、英語論文ではあまり発表されておらず、世界的には知られていない、ということであった。また日本の実践は、世界的な地域福祉・地域開発の議論を十分に理解できないまま、進展してきているのではないか、という疑問を抱いた。

本会議中には、香港・韓国のソーシャルワーカーや研究者と交流する機会を持つことができた。本会議は「世界会議」とされているものの、参加者は英語圏の国々や、ヨーロッパ文化圏からの参加が多く、アジアからの参加はそれほど多くはない。しかしアジア固有の価値観や文化を背景に、多様な地域課題に対して丁寧な地域福祉実践が展開されている。言語や文化の異なる文脈での地域福祉実践を世界規模に発信し、その特色を生かした地域福祉・地域開発実践を世界各国と共有していくことが地球規模での「多様性の尊重」につながる、という意見を香港の研究者から伺い、本会議に我々チームが参加した意義を確認することができた。

こうした世界会議への参加は初めての経験であったが、志を同じくするソーシャルワーカーや研究者との交流は、とても刺激的なものであった。次年度以降もこの経験を生かし、地域福祉・ソーシャルワークについて調査研究を進めていきたい。

初日の様子

スペインにおける社会保障・社会福祉
～障害者福祉を中心に～

一般研究（中野班）研究代表者・准教授　中野 加奈子

2018年8月28日～9月6日まで、スペインにおける社会保障・社会福祉の実際、特に障害者福祉を中心に、現地研究者との意見交換および事業所視察を行った。社会保障・社会福祉研究においては北欧や米英の事例が取り上げられることが多い。しかしこれらの国々は個人主義的な思想文化を持ち、家族主義をとる日本社会とは比較しにくい。一方、南欧諸国はカトリック文化を背景に家族主義を基礎とした政策を展開している。そこで、筆者が所属する研究チームでは、南欧諸国と日本の共通点・相違点を見出しながら、我が国の今日的課題である「社会的孤立」「社会的排除」「貧困」などについて検討してきた。今回の視察も、これまでの検討を踏まえて行ったものである。

今回、現地で意見交換をしたのは、バルセロナ自治大学で社会保障政策研究を行なって来られたJosé Adelantado氏とバルセロナ大学で教鞭をとられるManuel Aguilar Hendrickson氏である。Adelantado氏とは、エスピン・アンデルセンが示した福祉レジームについて、「スペインは、カトリックの宗教性・女性の社会進出の遅れ・失業率の高さ・中央政府の予算が少ない、などの背景から、家族での支え合いがなければ成り立たない社会となっている」といった状況を伺った。また、東アジアの家族主義レジームとの比較をするならば、「宗教・戦争・政治」という指標から検討が可能かもしれない、という示唆をいただいた。例えば、日本やイタリアは第二次世界大戦の敗戦国であり、戦後の民主化はイギリス・アメリカの強い権力の介入で展開された。一方、韓国やスペインは1970～1980年代まで独裁政権下にあり民主化が遅れた経験をもつ。日本・韓国は儒教・仏教文化を持ち、イタリアやスペインはカトリック文化が強固である。こうした分類を通して家族主義レジームを特徴付けていくことが可能ではないか、という見解に至った。また、Hendrickson氏からは、スペインは中央政府による社会保障政策は脆弱であり、個々の自治州における実態を見なければ政策の実際はわからない、という指摘をいただいた。

次に現地視察について述べる。今回訪問したのは、「エンベラバルセロナ事業所」「世界の医療団バレンシアクリニック」である。「エンベラ」はマドリッドを拠点とした障害者の就労支援事業所である。元々はイベリア航空の従業員家族の支援からスタートした。バルセロナ事業所で働く女性スタッフは育休復帰直後で「女性の子育て・家事負担がまだまだ大きい」という実態も話してくださった。また、「世界の医療団バレンシアクリニック」は、世界的に活動を展開する国際協力NGOの一拠点である。世界の医療団は、緊急的な医療提供のみならず、復興プログラム・長期開発プログラムを持ち、緊急事態が沈静化したのちの中長期的な医療的ケアを通して、脆弱な立場の人々の生命や人権を守っている。バレンシアのホームレスは移民の人々や貧困世帯出身の若年層が社会に馴染めず孤立し、薬物・アルコール依存に陥るケースが多い、と指摘されていた。女性については性風俗産業に巻き込まれ、望まない性労働・妊娠・性病罹患など心身に大きな影響を受けている、とも述べておられた。プログラムは支援者側から一方的に提供されるのではなく、サービス利用者も支援者として活動することで自尊心を取り戻したり、仲間との関係の中で自分の居場所を見つけ出していくという支援過程についてもお話を伺った。

財政難や女性の社会進出の遅れなどは我が国の実態とも共通しているし、筆者のフィールドであるホームレス支援現場でも薬物・アルコール依存問題、女性のホームレスの増加と性労働のつながりも指摘されている。今後の我が国の社会保障・社会福祉を考える上で、多くの示唆を得た視察となった。今後も引き続き研究を深めていきたい。

José Adelantado氏と筆者を含む研究チーム

ドイツ文献調査報告

東京分室 PD 研究員　松澤 裕樹

2018 年８月６日㈪から 16 日㈭にかけて、東京分室の指定研究「宗教的言語の受容／形成についての総合的研究――哲学的・宗教学的・人類学的視点から――」に関する文献資料調査のため、ドイツのテュービンゲン大学中央図書館と同カトリック・プロテスタント神学部図書館に出張した。

今回の文献資料調査では、1329 年３月 27 日に発布された教皇ヨハネス 22 世による異端宣告勅書『主の耕地にて（In agro dominico)』において異端宣告を受けたエックハルトの神秘思想が彼の断罪後、いかなる形で批判され、または肯定的に継承されていったかという問題に対して検討をつけるべく、14 世紀のドミニコ会とアウグスティノ会神学者の説教関連資料を中心に収集と複写を行った。

今回集中的に資料を収集した神学者の一人である 14 世紀のアウグスティノ会士であるクヴェードリンブルクのヨルダンは、彼の生きた 14 世紀から 15 世紀にかけて中世オランダ語圏と低地ドイツ語圏において非常に高名な説教者であったにもかかわらず、現在では中世哲学の研究者の間でもほぼ無名の存在となっている。しかし、彼のラテン語説教の内にはエックハルトのラテン語著作とドイツ語説教からの引用が散りばめられており、彼の思想の根幹を形成するほどまでにエックハルトの影響が色濃く残っている。それゆえ、これまで研究者の間では顧みられてこなかったヨルダンに着目し、彼のラテン語説教を分析することで 14 世紀におけるエックハルトの神秘思想の影響を明らかにしようと考えた。ヨルダンの著作の収集とその後の研究の成果を踏まえて、2018 年 11 月 10 日に聖心女子大学で開催された中世哲学会第 67 回において「クヴェードリンブルクのヨルダンのラテン語説教におけるエックハルトの影響」に関する発表を行った。

８月９日㈭には、テュービンゲン大学カトリック神学部のヨハネス・ブラハテンドルフ教授の家に招かれ、夕食を食べながら今後の共同研究の可能性について話し合った。ブラハテンドルフ教授は、2018 年９月から 12 月にかけて同志社大学文学部哲学科の客員教授として来日することが確定しており、教授が日本に滞在している間に様々なシンポジウムを開きたいとの要請を受けた。この会合が功を奏し、2018 年 11 月 24 日に同志社大学一神教学際研究センター（CIS-MOR）主催のワークショップ「マイスター・エックハルトにおける形而上学と神秘主義」を開催することができた。これまで日本のエックハルト研究者が一堂に会するようなワークショップが行われたことはなく、今回は日本初の試みとして非常に意義深いワークショップであった。そして、12 月 16 日に東京分室と立教大学大学院キリスト教学研究科の共催シンポジウム（第６回「宗教と人間」研究会）「恩寵と他力――キリスト教と仏教の対話――」を開催することができ、本出張での会合をきっかけにしてブラハテンドルフ教授と大谷大学の学術的関係も構築することができたのは大きな収穫であった。

また、2018 年８月 12 日㈰～14 日㈫にかけて、個人研究に関する文献資料調査のため、ドイツのテュービンゲン大学中央図書館と同カトリック・プロテスタント神学部図書館に出張した。個人研究に関する文献資料調査では、特に中世キリスト教神秘思想と存在論に関連する資料、特に 15 世紀の神学者であるニコラウス・クザーヌスの存在論に関する諸文献を中心に収集と複写を行った。

８月 13 日㈪には、ハイデルベルク大学哲学部のライナー・マンシュテッテン講師との会合を行った。マンシュテッテン氏は私が博士論文を執筆する際に大きな影響を受けたエックハルト研究者であり、またドイツを中心とする様々な修道院において坐禅の指導者としても活躍している。今回、私が博士論文を献本したことをきっかけに念願の会合が実現し、学術研究と宗教実践の関係について色々話すことができ、それは今後の研究の方向性に大きな示唆を与えるものであった。

ハイデルベルク大学哲学部前にて

国内学会参加・研究調査報告

第77回日本宗教学会学術大会
パネル発表「人口減少時代における地域と寺院のあり方研究」開催報告

新しい時代における寺院のあり方研究　研究代表者・学長　木越 康

2018年9月7日㈮～9日㈰にかけて行われた「日本宗教学会第77回学術大会」に、開催校（大谷大学）特別企画の名を冠して「人口減少時代における地域と寺院のあり方研究」というテーマのもとでパネル発表を行った。少子高齢化がますます進むと考えられるこれからの時代における過疎地域研究の一環として、当研究班がこれまで行ってきた研究の成果を中間的に報告し、多数の専門家と意見交換を行うことを目的として開いたものである。

代表者である木越による提題の後、本研究班研究員の藤元雅文・徳田剛に加え、研究班でも講演いただいた静岡大学の中條曉仁准教授をお招きして行った。各発表の後にはコメンテーターによる応答を受けて全体議論に入る予定であったが、9月6日未明に起きた北海道胆振東部地震による被害で、コメントをお願いしていた北海道大学櫻井義秀教授の参加がかなわなくなった。急遽、同様の研究関心をもつ石川県西田幾多郎記念哲学館長の浅見洋氏にコメントいただき、ディスカッションに入った。

本パネルは特定研究「新しい時代における寺院のあり方研究」を背景とするものである。同研究の狙いはもちろん、地域と寺院の活性化もしくは再活性化にあるが、大谷大学での1年半ほどの研究の取り組みの中から課題解決が極めて困難であることが明らかになってきている。課題解決が極めて困難である事情の第1は、個々の「限界集落」がもつそれぞれの「限界度」の違いや、寺族と門信徒あるいは行政それぞれの思惑の違いなどの問題が複雑に絡み合って一律に「再活性化」案の提示やそもそもの議論の土台を見出すことさえ困難である状況がある点である。これについてははじめの報告者である藤元氏から「過疎地域と寺院のあり方に関する報告――揖斐川町春日を中心に――」というタイトルで報告がなされた。また課題解決が困難である事情の第2に、研究はもちろん特定地域に範囲を絞って実地調査を行うスタイルで進むが、過疎地域における寺院のあり方研究は決して過疎地域に居住する人々のみを調査対象とするのではなく、「他出子」や「散り門徒」など、地域以外の関係者（移住者）への調査が必須となることがある。調査を広範囲にわたって行う必要があるという点で、本研究班でも想定以上に調査に時間がかかっている状況にある。ただこの点については同時に、問題解決の糸口ともなるものと考えられる。これについて徳田氏より「「過疎と寺院」問題をどう捉えるか－モビリティ論の視点から－」というテーマで、また中條氏からは「過疎地域における寺檀関係の持続可能性」というテーマで報告がなされた。各氏の報告については、日本宗教学会発行の『宗教研究』に掲載予定である。

私見では、過疎地域における寺院のあり方研究は、地域の内外問わず単に「生者」のみを考察の対象とするのではなく、「死者」とのつながりの問題である点を見失ってはならないということが明らかになってきている。寺院とかかわりのある住民が常に寺院に期待し、あるいは将来に不安を懐くのが「墓」や「法事」の問題に象徴される「死者（先祖）とのつながり」である。特に高齢者住民は、先祖のみならず自身の死後の行方の悩みも抱えながら、寺院の存廃について関心を持つケースがみられる。寺院と地域に関する研究は、「死者を含めた人間の在り方研究」であると言うべきであることが、調査の現状から明らかになってきていると言える。発表とディスカッションの後、会場からも興味深い質問を受け、研究者はもちろんメディア関係者を含めて多くの方々の関心を呼んだものと思われる。今回のパネル発表を契機にさらに交流の幅を広げ、研究推進に努めていきたい。

日本宗教学会・パネル発表の様子

日本宗教学会における EBS 主催パネル発表について

国際仏教研究（英米班）研究員・講師　Michael J. Conway

2018 年９月７日㈮～９日㈰にかけて、本学を会場に日本宗教学会の第 77 回学術大会が開催された。その開催に当たり、本学の研究活動の一端を広く知っていただくために、昨年度から運営母体が真宗総合研究所国際仏教研究班に移管された The Eastern Buddhist Society（東方仏教徒協会、略称 EBS）の主催のもと、「21 世紀の日本仏教・仏教学と社会貢献」と題するパネル発表が企画され、９月８日㈯の昼間に慶聞館の K 205 教室で行われた。本パネル発表は、二つの目的を果たすために組織された。一つは、日本仏教と仏教学がいかに社会的貢献をしていくべきなのかという問題を提起することであった。二つ目は、本学が運営する EBS、そして EBS が発刊している英文学術雑誌『*The Eastern Buddhist*』が具体的にどのようにその貢献に資することができるかということについて、関係者が考察し、多くの研究者から提言をいただくためであった。時間的な制約の中で、二番目の目的が主となり、EBS の今後のあり方と『*The Eastern Buddhist*』誌の編集方針について考える良い機会となった。

パネルは井上尚実（本学教授、東方仏教徒協会内部顧問、嘱託研究員）先生の司会のもと、次の５名による発表で構成された。井上尚実先生、マイケル・パイ（マールブルク大学名誉教授、『*The Eastern Buddhist*』誌編集長、嘱託研究員）先生、ジョン・ロブレグリオ（オックスフォード・ブルックス大学准教授、『*The Eastern Buddhist*』誌編集者）先生、蓑輪顕量（東京大学教授）先生、下田正弘（東京大学教授、東方仏教徒協会編集顧問、嘱託研究員）先生。

先ず、井上先生はパネル全体の趣旨説明を兼ねて、「東方仏教徒協会（EBS）と大谷大学」という題で発表した。協会の設立目的や雑誌の編集方針について『*The Eastern Buddhist*』誌に掲載されている文章を紹介しながら、1921 年に始まる EBS の歴史を辿り、常に大谷大学の教育と研究活動に近い形でその活動が展開されてきたということを確認した。編集方針が明記されている文章に注目することによって、設立当初より協会の 100 年に及ぼうとしている歴史を通じて、雑誌の発行は単に仏教学の知識を世に公開するだけの目的で行われてきておらず、大乗仏教の精神を広く人々に共有することによって、世界の平和や人類の相互理解と受容を目指してきたということを提示した。

次にパイ編集長は「学問の中からこの世に応じる仏教の声――EB の使命――」という題のもと、編集長として勤めてきた７年間を振り返りながら、『*The Eastern Buddhist*』誌に刊行されている学術論文がいかに社会貢献できるのかということについて語った。更に先生は今後、より一層、雑誌が社会に対して貢献していくために取り上げられるべき課題やテーマを示唆して、雑誌の将来像についてのビジョンを描いた。

そして、「イデオロギー論争によって分断された世界にある仏教・仏教学」と題する発表においてロブレグリオ編集者は、世界的な傾向として近年の政治的右翼化に伴う社会的分断と対立に警鐘を鳴らしつつ、仏教の思想と仏教学が果たすべき役割について考察した。その役割を果たすために『*The Eastern Buddhist*』誌の紙面を活用し、1965 年に雑誌が戦時中から続いていた長い中断から再出発しようとした際に発表された発行目的に立ち還り、その分断を乗り超えるよう、大いに社会貢献をしていくべきだと論じた。

蓑輪先生の発表は「仏教者の社会貢献とは何か――精神的苦痛からの解放――」と題され、2011 年の大震災から日本の仏教界が社会から様々な要請を受けながら、活動内容を変革しつつある中で、仏教学そのものがどのような役割を果たすべきかということを問うた。答えとして、過去の文献を見据えながら、現代の仏教活動を鮮明に捉え、仏教界の諸活動に際して、参照し得る研究成果を上げるべきだと述べた。

最後に「仏教・仏教学と社会貢献――EB 誌をめぐって――」と題して、下田先生はそれまでの発表に応答しつつ、自身が捉えている現在の仏教学界の課題と今後の可能性について述べた。世界の思想史における現代の位置付けを明確にし、仏教思想の貢献すべきところの究明の必要性を指摘した。

以上の発表が終了してから、パネリストの間で議論がなされた。そして、参加者からの質問が受け付けられ、活発な議論となり、多くの貴重な提言がなされた。

このように『*The Eastern Buddhist*』誌の社会貢献の可能性について、様々な角度から提案がなされたので、編集部では、更に吟味を加え、今後の編集方針に反映していく所存である。

「新しい時代における寺院のあり方研究」における国内調査報告

新しい時代における寺院のあり方研究　研究員・講師　藤元 雅文
同　研究補助員(RA)・博士後期課程真宗学専攻第二学年　松岡 淳爾

特定研究の２年目となる2018年度は、その上半期において、調査研究対象地域である岐阜県揖斐郡揖斐川町春日地区の寺院調査を継続的におこなうと共に、新しい調査内容を展開することができた。それは、門徒および地域住民に対する聞き取り調査である。これは「門徒、地域住民の視点から寺院の意義や寺院および地域における現状・課題を考える」という視座に関わる調査であり、「寺院は地域社会をどのように支え、歩みを共にすることができるのか」という本研究班の視点においても重要な調査内容となる。

ここでは、最初に2018年度上半期において行った調査の具体的な日時や場所等を記し、次に寺院調査の概要（研究員・藤元）、さらに門徒および地域住民調査の概要（研究補助員・松岡）について報告していく。

調査を行った対象および日時、場所等は以下の通りである。

〇揖斐川町春日地区　寺院（真宗大谷派）調査

【法性寺・聞き取り調査】
日時　2018年５月８日㈫
場所　電話による聞き取り

【西蔵寺・聞き取り調査】
日時　2018年６月15日㈮
場所　真宗大谷派大垣教務所（岐阜県大垣市）

【長光寺・聞き取り調査】
日時　2018年６月23日㈯
場所　長光寺（岐阜県揖斐川町春日）

〇揖斐川町春日地区　門徒および地域住民調査

【岐阜県揖斐川町春日総区長（１名）・遍光寺門徒（２名）聞き取り調査】
日時　2018年６月15日㈮
場所　揖斐川町春日下ヶ流地区集会施設（岐阜県揖斐川町春日）

【光永寺・門徒（３名）聞き取り調査】
日時　2018年７月28日㈯
場所　光永寺（岐阜県揖斐川町春日）

【長光寺・門徒（１名）聞き取り調査】
日時　2018年８月２日㈭
場所　岐阜県揖斐郡池田町内　老人福祉施設

【寂静寺・門徒（３名）聞き取り調査】
日時　2018年８月６日㈪
場所　寂静寺（岐阜県揖斐川町春日）

以上、真宗大谷派寺院３ヶ寺、また真宗大谷派４ヶ寺にかかわる門徒および地域住民から聞き取り調査を行うことができた。

では次に、寺院調査の概要について報告する。ここでは、調査によって聞き取ることができた内容のうち、寺院（運営、法務など）および門信徒や集落の現状を中心に書き記しておきたい。

今回調査を行った３ヶ寺は総て春日の中でも平野部からより距離のある美束地区に所在しており、またすべての寺院が他の職業など兼務しながらの寺院運営で、寺院に居住している住職はいない状態である。報恩講や永代経など従来から勤められている法要は現在でもなんとか維持されているが、その参詣者は数名から十数名という状況で、ほぼ全て高齢者である。葬儀については、地域住民の人口減少および高齢化が非常に進んでいるため、以前のように地域で協力しては行えない状況であり、現在は多くの場合、平野部にある葬祭会場で行われている。また、２ヶ寺は年忌法要も短くなる傾向であり、具体的には３回忌までで終わる場合も少なくないという。墓地および納骨に関しては、寺院の敷地内には墓地はなく、本山に納骨するのみの場合、また地区墓地が整備されていて、各自の「家」の墓へと納骨する場合など、寺院によって様々である。

また今回の調査対象となった寺院の門徒数は、すべて数戸から十数戸の間であった。さらに、地域に住む門徒はほぼすべて高齢者であり、80代が中心の集落もある。80代で一人暮らしの家も散見され、寺院に関わる負担をお願いできない状況の門徒もある。一方、住職は兼務をしているので、寺院の草取りや掃除などに関しては門徒が熱心に関わることが多く、寺院を住持する者と門信徒が可能な範囲で協力して、寺院の施設等を維持管理している様子を見て取ることができた。また春日を離れ近郊に住む門徒（他出門徒）

で、寺院に関わりを維持している数はどの寺院も数軒であるが、報恩講や永代経、彼岸会などに参詣する他出門徒もおり、寺院の行事が顔をあわせる貴重な機会となっているようである。

３ヶ寺の寺院調査を通して、人口減少、少子高齢化が極めて進んでいる寺院および門徒の現状を改めて確認する形となった。聞き取り調査の中で、「何か工夫して、もりたてようにも、すでにそれがマンパワーとして、できない状態」であるという言葉を耳にし、いかに厳しい現状に寺院側が直面しているか、実感する機会であった。一方で、それでも寺院にいろいろな役割や期待をもって関わってくださる門徒がいるかぎり、精一杯寺院を護っていきたいという言葉、実際に寺院施設の修善など可能なかぎり自前で行ない、やれることはできるかぎりやっていこうとする住職の姿勢に触れることができる調査でもあった。

では、次に門徒および地域住民調査についての概要を記す。

この度の揖斐川町春日地区における門徒聞き取り調査は、2017 年度下半期から 2018 年度上半期にかけて本研究班が行なった同地区における真宗大谷派寺院調査に関連し、門徒や地域住民の視点から、地域と寺院に関する現状と課題の整理・分析のために実施したものである。これまでに、春日地区に所在する真宗大谷派寺院９ヶ寺のうち、すでに８ヶ寺の調査を実施しているが、本調査では、その８ヶ寺のうち４ヶ寺のいずれかに中心的に関わっておられる門徒方から聞き取りを行った。

まず、春日地区の地域概況については、すでに報告済みの寺院調査や上記の報告からも明らかなように、過疎化・少子高齢化による人口減少が著しい地域である。この点は、本調査の中で、いずれの門徒にも共通して窺える問題意識であった。この人口減少の要因として、例えば製炭業のように、従来は地域住民の生活を支えていた産業が、現代において生活基盤とはなり得なくなり、働き世代が地域の外に仕事を求めて他出していったことが挙げられる。仮に、春日地区に居住しつつ近郊の市や町に通勤しようにも、同地区が中山間地域であるという特性から、そもそも住む土地がなかったり、冬の厳しい気候条件も相まって通勤しづらかったりと、春日地区の地理的環境が他出に拍車をかけているようである。また、一定数子どものいる地域の学校に自身の子を通わせたいという子育て世代が多く、若い世代が根付きにくいことから、人口減少がさらなる人口減少を招くという状況を聞くこともできた。

一方、他出した方々の動向については、その他出先は揖斐川町や池田町など、比較的近郊の、しかも岐阜県内の市町村がかなり多いことが分かった。他出先が県外である場合にも名古屋までにとどまるケースがほとんどであり、聞き取り調査の範囲ではあるが近郊他出の傾向があると推測することができるようである。このように、他出先が近郊であることによって、特に地元である春日に親・兄弟姉妹世帯が残っている場合には、地域の伝統行事や寺院の年中行事の際に高い頻度で帰ってきているようである。そこで、以下は春日地区の寺院に所属する門徒（他出も含む）あるいは地域住民の視点から、当該地区における寺院の現状や課題、そして役割について、聞き取り調査の中で得られた情報を元に概説する。

先述のように、春日地区は過疎化・少子高齢化による人口減少が著しい地域であり、当該地区の寺院の運営基盤となる門徒の数も、それに比例して減少している。しかし一方で、春日地区の外に他出した人々が門徒としていまだに寺院に関わっているケースが少なからず存在し、そのことが寺院運営を維持するパワーとなっている事例もある。その寺院への関わり方は様々で、法事や法要の際の花立てや仏具のお磨き、お斎やお華束の準備など一般的なものから、他出門徒の取りまとめ役として寺院の通信を配ったり寺院との情報伝達の仲介を担ったりするなど、寺院独自の工夫が為されているケースも見られた。また、寺院に対する想いを、「お話を聞く場」、「なくてはならない集いの場」と語られる言葉を聞き、門徒の方々の生活面、精神面での支えとなっていると感じることができた。

本調査で聞き取りできた限りでは、いずれの門徒の方々も、今後の寺院の維持・運営について何がしかの不安を抱えていることは明らかであったが、それゆえに「自分たちのお寺」という意識で寺院を護り、後世に少しでも長く教えと共に寺院や地域の歴史を残していこうという熱意が強く感じられた。

長光寺・寺院調査

歎異抄ワークショップ開催報告

第４回『歎異抄』翻訳研究ワークショップ参加報告

国際仏教研究（英米班）研究員・講師　Michael J. Conway
修士課程真宗学専攻第一学年　Yul Otani

2018 年６月 22 日㈮から 24 日㈰にかけて、龍谷大学の大宮校舎にて、第４回の『歎異抄』翻訳研究ワークショップが開催された。本ワークショップは、カリフォルニア大学バークレー校東アジア研究所と龍谷大学世界仏教文化研究センターと三者の学術交流協定に基づく研究プロジェクトの一環として行われ、国際仏教研究班の研究員２名に加えて、本学の大学院生が多く参加した。本プロジェクトは、江戸期に作られた『歎異抄』の注釈書の英訳作業を通して、その注釈史を反映する詳細な注記を含む『歎異抄』英訳の作成を目的としている。そして、その英訳作業を、キャリアの様々な段階にいる研究者と共同で行うことを通して、英語圏における次世代の真宗研究者の育成をも目指している。

参加した大学院生を代表して、大学院修士課程の真宗学専攻に所属している Yul Otani 氏の参加報告と所感を以下に掲載する。

2018 年６月に龍谷大学で開かれた第四回『歎異抄』翻訳研究ワークショップに参加した。前回と同じく、４人の先生を担当として参加者がグループに別れて『歎異抄』の江戸期の注釈書を分析し、英訳の作業を行った。ブラム先生は円智の注釈書を、嵩先生は寿国、コンウェイ先生は深励、そして井上先生は了祥を担当された。第４回でも、多くの参加者は一つのグループでのみ活動したが、私は今回、３日間で行われた６つのセッションを通して、全てのグループを回り、各グループのメソッドを観察できた。

今回は『歎異抄』第３章に関わる注釈が中心であった。この章は悪人と善人の往生を語る章として、主な注釈書は悪人正機・善人傍機の理論を展開する。各注釈書の解釈に先立ち、各グループの翻訳の仕方に個性があり、キーワードである悪人・善人・正機・傍機の言葉の翻訳の仕方も異なっていた。基本的な参考書である『*Collected Works of Shinran*』においては、悪人を evil person、善人を good person と訳す。今回、下訳として提示されたコンウェイ先生の第三章本文の翻訳にもその訳が使われ、嵩先生のグループでもそのように訳した。井上先生は同じスペルではあるが、悪人は大文字の Evil Person にして、普通名詞と区別を付け、専門用語として扱った。それに対して善人は小文字の virtuous person の普通名詞として翻訳し、『歎異抄』で扱われる悪人が特徴的であることに注目している。なお善人の訳語 virtuous person は、坂東性純・H. Stewart の翻訳で使われた wicked person と virtuous person に基づく。

ブラム先生は evil の言葉に対する抵抗を示した。先生は、英文におけるその言葉の意味が「psychopath」のような悪いイメージを持つから、一般の読者に共感が難しいということを述べ、その使用を避けるべきと主張した。また悪人という言葉は『涅槃経』の背景を踏まえるならば、そこで悪人が凡夫という意味を持つため、それに近い意味を求めて troubled person と訳した。

正機と傍機については、嵩先生は正機を main object と翻訳した。井上先生は proper object、もしくは primary object と訳し、それに対して傍機を secondary object と訳した。また、ブラム先生は正機・傍機両方が本願の対象になるというニュアンスをより明確に伝えようとして、格外な訳し方 foregrounded person（前景に置かれた人）と backgrounded person（後景に置かれた人）を訳語として採用した。

今回のワークショップは、一つの言葉に対する様々な訳し方の可能性を実践的に学ぶ場所となった。特に、他分野を専攻する学者達との交流を通して、多くの『歎異抄』の術語に関して新しい訳語が生まれ、註釈が加えられることが、より一般の人々に対して訴求力を持つ英訳を作ることになる。このワークショップはまだ続くが、この様な作業を繰り返すことでよりよい『歎異抄』の註釈付き英訳が生まれることになるだろう。

以上のように今回のワークショップの中で、英語圏で真宗を語る際の様々な課題が明確になり、多くの学生と共有することができた。

公開講演会・公開研究会

目片祥子氏による公開講演会

国際仏教研究（英米班）研究補助員（RA）・博士後期課程真宗学専攻第一学年　鶴留 正智

国際仏教研究班では、各年度に２回ほど外部から講師を招いて公開講演会を開催している。そのテーマはさまざまであるが、今回は「チベット仏教史――サキャ派系譜を中心として――」という題のもとで目片祥子氏（ハーバード大学南アジア学科ポストドック研究員・チベット語講師）による講演を開催することになった。当初、日時は 2018 年７月６日㈮に行う予定であったが、平成 30 年７月豪雨が京都をはじめ西日本各地に被害をもたらしたため、期日を延期して同年８月７日㈫の 16 時半から行うこととなった。そのため夏休み中の開催となり、参加者が少ないのではないかと危ぶまれたが、本学の教員をはじめとして多くの来聴者が集まった。

国際仏教研究班では英語による公開講演会を行うことも多いが、今回は日本語で行った。また質疑に関しても日英両語で可能と告知したが、結果的に当日の質問は日本語によって行われた。

氏は、大谷大学に博士論文を提出され、2011 年に文学（博士）の学位を大谷大学より授与されている。大谷大学文学部に入学したのは 1997 年のことで、爾来、西蔵大学への１年の留学をはさむほかは、大谷大学において学びを深めた。その成果が「初期サキャ派成立史の研究」と題された博士論文であって、その「はしがき」には、文学部での指導教員であったツルティム・ケサン（白館戒雲）先生との出会いや、大学院では荒巻典俊先生のゼミで指導を受けたこと、そして福田洋一先生から論文指導を受けたことなどが記されている。今回の講演もほとんどの参加者は氏に親しみを持っていたようである。

講演の内容は、氏が大谷大学で研究した内容と地続きで、それに加えてアメリカでの仏教研究について、その概略が示された。以下は講演の内容である。

まず氏は、専門としているサキャ派が、チベット仏教においてどのような位置づけにあるかチベット仏教史全体を通して示した。チベット仏教は 100 年ほど前から外国人がチベットに訪れたことによって研究が盛んになったが、それによれば、チベット仏教が興ったのは７世紀、ソンツェン・ガンポ王が唐とミャンマー、それぞれから妃を受けてからのことである。11 世紀、それ以前まで伝わった仏教を基にしたニンマ派と、新しくインドから輸入した仏典を基とした新派に別れた。サキャ派は新派の一つであって、元朝と強い関係を結んだが、それ以後は他の派に比べると勢力が強くなかったとのことである。

次いで、アメリカでの仏教研究の現在が説明された。どの大学や、どの研究機関で仏教が研究されているか、また仏教を研究していると言ったときの具体的な対象は何か、どのような先生が仏教を研究しているかなど、網羅的な説明であった。大学では宗教学や、歴史学、アジア学のような地域学などで学ばれることが多いようである。

NPO や財団においてもチベット仏教の研究は行われており、インターネット上で閲覧できるデータベース、たとえば TBRC（現在は BDRC）などはそれぞれの財団が行っている。また翻訳に関する団体もあって、「84000」はそのような団体の一つである。これらの財団の収益源は、アメリカでは寄附文化が盛んであるため、少額の寄附で成りたっている財団から、個人がスポンサーとなって活動している財団などさまざまである。

近年、中国やインドで出版されたチベット仏教に関する全集は、2000 年代以降で６部以上を数え、現在も充実しつつある。これらの資料によって、チベット仏教研究は現在も前進している。

最後に、先生が専門としているサキャ派の歴史を詳述していただき、また活発な質疑応答が行われて、盛況の内に講演会は終了した。

講演される目片祥子先生

清代に北京で開版・印刷された チベット語文献に関する公開講演会を開催

西蔵文献研究　研究代表者・教授　三宅 伸一郎

2018年4月27日㈮午後4時30分より、響流館3階マルチメディア演習室にて、中国蔵学中心図書資料室館員ソナム・ドルジェ氏をお招きし、「清代（17～20世紀初頭）に北京で開板されたチベット語文献とチベット古文献の保護について（Ching rgyal rabs skabs pe cing du par ba'i bod yig dpe cha dang bod yig gna' dpe'i srung skyob skor bshad pa）」との講題のもと、公開講演会が開催された。今回の講演会は、本学の名誉教授であり西蔵文献研究班の嘱託研究員でもあるツルティム・ケサン（白館戒雲）先生が、御蔵書――長年収集したチベット語文献や仏教学・チベット学関係の研究書など――のほとんどを中国蔵学研究中心に寄贈するということで、その受領に関わる契約と発送作業のために中国蔵学研究中心の一行が来日するのに合わせて開催された。

講演では、まず、チャンキャ=ガワン・チョーデン（lCang skya Ngag dbang chos ldan, 1642-1714）、チャンキャ=ロルペー・ドルジェ（lCang skya Rol pa'i rdo rje, 1717-1786）、トゥケン=ロプサン・チョーキ・ニマ（Thu'u bkwan Blo bzang chos kyi nyi m, 1737-1802）、パンチェン・ラマ6世=ペルデン・イェシェー（Paṇ chen dPal ldan ye shes, 1738-1780）ら、清代に北京で活動した重要な化身ラマについて簡単に紹介された。次に、北京で製作されたチベット大蔵経について述べられ、1667～1669年にかけて建立された金写カンギュル（龍蔵経）の紹介や、いわゆる北京版チベット大蔵経についての知見が述べられた。次に、嵩祝寺、雍和宮、大慈仁寺、黄寺などの印経院や私営の印刷工房について、具体的に、それぞれの場所で開版・印刷された文献の写真が提示されながら紹介された。

その上で、北京で開版・印刷されたチベット文献を仔細に観察すると、用紙やインクの状態等から、明らかに清末・民国時代に開版・印刷されたものであるにもかかわらず、末尾にある漢語の跋文に、康熙・雍正・乾隆などの古い年代が入っているものや、そうした古い年代が入った漢語の跋文の部分のみ他のチベット語文の部分とインクののりが異なるものが見られるが、それらは、古い年代のものに見せようと偽装されたものであると、具体的な実例をいくつも示しつつ指摘がなされた。同じ版でありながら、漢語の跋文の部分のみ異なる例も提示されたことから、この指摘は、大いに説得力を持つものであった。本学の図書館に所蔵されているいわゆる「蔵外文献」（『大谷大学図書館所蔵西蔵文献目録』［大谷大学図書館、1973年］にて目録化されているチベット語文献のコレクション）の多くを、北京で開版・印刷されたものが占めており、それらの中には、漢語の跋文を持つものも多い。そうした跋文は目録に記載されており、私たちはその記載から、それらの版本の年代を判定していた。今回の指摘は、こうした判定に再考を促す極めて重要なものであった。

北京で開版されたチベット語文献の特徴として――1）表題にチベット語のみならず、漢語、モンゴル語、満洲語などが併記される　2）文献中（主にその冒頭）に掲載されている仏画は、蔵漢の芸術様式が融和している。3）葉数はチベット語・漢語が併記される　4）用紙には良質とは言えない中国紙が用いられ、乾燥した場所では劣化しやすく長期保存に耐えられない。ただし、大蔵経は除く――の4点があげられた。

最後にデルゲ版を底本とし、各版本との異同を注記した中華大蔵経（蔵文版）や、貴重な蔵外のチベット文献を新たに編纂・出版する「中華大典・蔵文巻」など、中国蔵学研究中心が行なっているチベット古文献の保護に関わる事業について紹介された。学内外からの参加者があり、質疑応答も活発に行われた。

なお、本学と中国蔵学研究中心の間では、2018年10月に「学術交流に関する協定書」が締結された。これにより、中国蔵学研究中心との間の学術交流がますます活発となり、チベット学に対するそれぞれの研究水準がより向上することが期待される。

モンゴル国立大学との共同研究会報告

西蔵文献研究　研究員・教授　松川 節

モンゴル国立大学総合科学部との学術交流協定に基づく共同研究「モンゴルにおける仏教の後期発展期（13～17 世紀）の仏教寺院の考古学・歴史学・宗教学的研究」の一環として、2018 年６月 25 日～７月２日までモンゴル国立大学総合科学部哲学・宗教学科の S. デムベレル講師を大谷大学に招聘し、共同研究を行った。６月 29 日㈮16：30～18：00 に響流館マルチメディア演習室にて西蔵文献研究班主催で公開講演会を開催し、S. デムベレル講師の講演「モンゴルで新たに発見されたチベット語仏教文献」（Newly discovered Tibetan Buddhist scriptures from Mongolia）を拝聴した。

新たに発見されたチベット語仏教文献は、かつてのセツェン・ハン・アイマグのスジグト・ベイス旗、現在のヘンティ県バトノロブ郡イデルメグ村に位置するスジグト寺の経頭ラマ・D. ロブサンダンザン師の旧蔵書で、現在、モンゴル国文化功労者・作家・画家の J. サロールボヤン博士が管理しているものである。デムベレル講師を始めとする４人の研究者がチームをつくり、2018 年３月３日～３月 10 日までこの蔵書を調査し、1,000 点以上のチベット語文献を確認し、4,000 枚以上の写真を撮影した。

サロールボヤン博士によると、ロブサンダンザン師の旧蔵書は膨大なものであったが、様々な経緯により大半が失われ、現在残っているものが今回の調査対象になったという。その大半は写本であり、ごく少数の木版本がある。内容的に、６割以上がタントラ儀軌に関する仏典であることは、ロブサンダンザン師の蔵書の特徴となっている。

調査の成果として蔵書目録が作成された。チベット語経典名、モンゴル語訳、葉数と行数、サイズ、著者名がそれぞれ記される。いつでも出版可能な状態である。

作成中の目録

調査のようす

特定研究　研究会報告

那須公昭氏（浄土真宗本願寺派総合研究所）「浄土真宗本願寺派の過疎認識とその対策」
中條曉仁氏（静岡大学教育学部）「過疎地域における寺壇関係の持続可能性−他出子の動向に注目して−」

新しい時代における寺院のあり方研究　研究員・准教授　徳田 剛

特定研究「新しい時代における寺院のあり方研究」は２年目を迎え、岐阜県揖斐川町春日地区において地域と寺院の現状とそれぞれが抱える課題について現地調査を進めているところである。山間地域の人口減少とそこに立地する寺院の持続可能性の問題は全国各地で見られるものであるが、その現われ方は地域状況の違いによって異なったものとなりうるし、対策についても地域ごと、あるいは教団・宗派ごとに違ってくる。本研究班が目下進めている調査研究をどのように総括していくかというこれからの課題に取り組むためには、同様の問題意識のもとに進められた、他の研究者・グループの取り組みや他地域の事例との比較考量を行う作業が不可欠となる。2018 年度の上半期では、このような趣旨に基づいて２名の学外研究者を招聘し、研究会を開催した。

2018 年５月 28 日㈪に開催された第１回目の研究会では、浄土真宗本願寺派総合研究所・研究員の那須公昭氏をお招きし、「浄土真宗本願寺派の過疎認識とその対策」という講題にてご講演をいただいた。同派は過疎問題に照準した寺院・地域調査をいち早く実施するとともに、宗門での過疎対策の取り組みの蓄積もあることから、取り組みの概要とそこからどのような知見を得られたかについてお話しいただいた。

那須氏の報告によれば、本願寺派寺院は西日本に多く分布しており、とりわけ「安芸門徒」「石見門徒」と称されるように、中国地方などに多くの寺院と門徒を有している。これらの中国山地周辺の各地域はいち早く過疎問題が顕在化したところでもあり、そこでの寺院運営のあり方についていち早く認識される状況にあった。那須報告では、同派宗勢調査の結果などを踏まえながら寺院の立地、門徒数、寺院収入、今後の寺院運営の見通し等に関する基礎データが示された。その分析結果は、同派を中心としたその後の地域調査の対象地選定において参照されている。

次に、同派総合研究所が中心となって行われた調査研究の概要が示された。そこでは、集落内に暮らす高齢世帯の他出子の動向に着目していること、実際にどの家の子がどこに暮らしているかを地域住民とともに明らかにしていく「T 型集落点検」の手法が採用された（広島県三次市作木町、石川県七尾市能登島町での調査）。これらの調査からは、両地域ともに他出子が比較的近郊（郷里から１時間以内）に居住しているケースが多く、いかにこの他出子世帯と関係を作っていけるかが重要であることなどが示された。そして、超宗派の「過疎問題連絡懇談会」での勉強会・講演会の開催や共同調査の概要を説明し、過疎対応は各宗派共通の課題であって一宗派だけの取り組みで対応できるものではなく、各教団・研究グループの連携の重要性が改めて指摘された。

2018 年７月２日㈪には、静岡大学の中條曉仁氏をお招きし、「過疎地域における寺壇関係の持続可能性－他出子の動向に注目して－」という講題でご講演をいただいた。中條氏は農村地理学などが専門で、特に中山間地域・過疎地域の現状に詳しく各地でフィールドワークを実施されている。また、ご自身の日蓮宗僧侶の立場からも、人口減少地域での寺院運営の現状と今後の見通しについて強い関心を持ちながら各地を回られている。

中條氏からは、過疎問題のとらえ方とそこに立地する寺院の現状と課題、とりわけ今後の寺壇関係の存続可能性についての分析視角が示された。中でも、檀家の家族構成の変化（とりわけ故郷からの子・孫世代の転出と家族の分散居住傾向）が檀家数の減少の大きな原因となっており、他出子世帯との関係構築によって広域化した家族の生活圏に寺院がうまく対応できるかどうかが今後の寺壇関係の持続可能性の鍵となることが示唆された。そのうえで、那須氏の講演でも紹介された作木調査のデータから、他出子の他出先エリア、他出子の属性（性別・きょうだいの長幼の違いなど）などに着目しつつ、帰郷の目的、頻度についての分析がなされた。

那須氏、中條氏らが実施した作木調査は、本研究班の岐阜県揖斐川町での地域調査にとっての貴重な先行研究ということもあり、今後の成果取りまとめにあた

って大変参考になった。また、浄土真宗本願寺派、日蓮宗など他宗派の過疎問題への取り組みについても詳述され、貴重な知見を研究班メンバーおよび研究会参加者の間で共有することができた。

東京分室主催公開研究会
「監獄教誨の歴史と現在－「悪」からみた近代」開催報告

東京分室 PD 研究員　藤原 智

2018 年８月３日㈮16 時から、第５回「宗教と人間」研究会を親鸞仏教センター５F で開催した。テーマは「監獄教誨の歴史と現在――「悪」からみた近代」、講師には明星学園教諭／早稲田大学現代政治経済研究所特別研究所員の繁田真爾氏をお招きした。

講師の繁田氏は、近代の思想史・仏教史を専門とされている。その中で清沢満之に深い関心を寄せられ、特に清沢が「悪」ということに深い眼差しを向けていたことに注目し、その「悪」の思想と近代日本社会との交錯の場として監獄教誨の歴史ということを研究されている。その繁田氏に、現代における死刑制度ということまで視野に入れながら、監獄教誨についてのお話をいただき、その後一般の参加者も交えて議論を行った。以下、繁田氏の講演を要約する。

繁田氏は、まず監獄（刑務）教誨の現在として、現代に宗教教誨がどのように実施されているのか、その実施状況や受刑者の意識など、具体的なデータを用いながら説明された。その上で、監獄（刑務）教誨の歴史として、今日まで続く監獄教誨の起源にまでさかのぼり、まず制度化にあたって重要な役割を果たしたのは明治 10 年代後半のキリスト教（徒）であり、その後明治 25 年以降に真宗が急速に台頭してくることが紹介された。そして、その「教誨」政策に一貫した理念として「悔過遷善」があることを指摘された。そのような教誨事業の中で、清沢と同時代には人間の「悪」に共感し主体の矯正を第一義とはしない異端的教誨師（藤岡了空・田淵静縁など）が登場することや、昭和初期には治安維持法制定に伴う思想犯教化として教誨事業への期待が高まったこと、特に死刑制度をめぐって「矯正」と「死刑」との矛盾に直面する教誨師の発言など具体的事例を通しながら、教誨師たちが抱えたジレンマを紹介された。そして最後に教誨制度・死刑制度について、制度の歴史と当事者の声をふまえながら考えていくべきことを提言された。

繁田氏の講演に対し、その後の質疑では、「死刑の賛成・反対はどれくらいか。またネットでは非常に過激な意見も見られるが、どうお考えか」、「裁くということについて、キリスト教では裁く神ということがあるが、仏教、真宗の場合は刑罰を認めるロジックが出てこない点について」、「真宗は、時代的な事実として国家権力の一端となり、それが戦前までの教誨の在り方の一つのジレンマに思えるが、その点について」、「監獄教誨において真宗的には悪の自覚に導くという方向だとして、被害者にはどのようなアプローチをするのか」、「教誨の記録はあるのか」、「戦前と戦後で教誨の方向の変遷はあるのか」、「一般教誨と宗教教誨の違いは何か」、「日本でキリスト教の信徒の割合に対して、キリスト教教誨師の割合が多いが、受刑者との親和性があるのか」、「日本の法制度は、西洋のものをもってきただけなのか、それとも日本での根拠づけというものがあるのか」、など参加者の様々な視点から質問や意見が出され、非常に活発な議論が行われた。

講師の繁田氏

研究会の様子

東京分室 PD 研究員個人研究成果概要

プロテスタント・キリスト教の世俗的役割 ータイとミャンマーにおけるカレン民族の事例からー

元東京分室 PD 研究員　田崎 郁子

本研究の目的は、タイとミャンマーに居住するキリスト教徒カレンを事例として、プロテスタント・キリスト教の世俗的役割について明らかにすることである。東南アジアのキリスト教宣教や受容に関する人類学的先行研究では、キリスト教はアイデンティティとの関連や教義や神格の解釈といった形而上学的な側面から論じられることが多かった。しかし、アフリカやオセアニアなどの事例を見ると、キリスト教の受容は、形而上学的な側面だけでなく、生活スタイルや社会の在り方そのものを再編することが指摘されている。本研究でもこの視点に着目し、日常生活、特に経済活動や開発、教育といった世俗的な文脈におけるキリスト教の役割について調査・考察を行った。

タイでは、博士課程から調査を続けているチェンマイ県ボケオ行政区のカレン村落において、①宣教団と関連する開発プロジェクトの影響について、②宣教活動が村人の男女の役割分業に与えた影響について、文献調査とフィールドワークをもとに明らかにした。

①宣教団と関連する開発プロジェクトの影響

ボケオにおける宣教は 1930 年代に始まり、教会と集落が設立されると、第２次世界大戦後には宣教ステーションとして、北タイのカレンにおけるバプテスト宣教の中で重要な役割を果たし、様々な開発プロジェクトの対象地域となってきた。1960 年代には米人宣教師夫婦による活動を中心として、婦人労働を中心とした生活改善指導や労働生産性の向上、キリスト教徒としての概観を整えるための経済力向上が目指された。70 年代に入るとタイーノルウェー教会支援プロジェクトや国連主導の開発プロジェクトなどの国際 NGO、また王室プロジェクトをはじめとするタイの行政、鉱山やイチゴ栽培などの民間が何重にも組み合わさり積み重なりながら、教会と相互に開発を促進してきた。ボケオは山が開けた盆地に急に町が現れたかのような景観を持つが、北タイ山地の中でもかなり開発の進んだこのような景観は、まさに教会を中心に、開発プロジェクトが次々に乗り入れてきたことで形成されてきたのである。また、これらのプロジェクトの影響として、教育機会拡大、外部社会との連結・協同の可能性の開拓、婦人労働への着目、現金収入源を換金作物栽培や織物へ求めるスタイルの形成、貯蓄グループの結成に伴う貯蓄の概念の誕生、が指摘できる。

②宣教活動が男女の役割分業に与えた影響

先行研究でも指摘されてきたように、元来カレンの家事労働における男女の労働分業は比較的緩やかで、男性も女性と同様に炊事や育児などの家事労働を受け持つことが指摘されてきた。しかし調査地では、1960 年代 70 年代にボケオに居を構えて宣教活動に携わった米人宣教師ディカーソン夫妻が、当時酒やアヘン中毒などのために役立たない男性が数多く居る中で、女性労働に着目し、家事や農業、織物などの多方面に渡ってカレンの人々を教育する教室を開催し、女性によって人々の生活を向上させようと取り組んできた経緯がある。宣教の過程で西洋的な「家庭内領域」というイデオロギーが誕生し、それはプロテスタンティズムの倫理と資本主義の帰結でもあると先行研究で指摘されているように、調査地でもこれを受けて、既婚女性の役割として家事労働が定義された。キリスト教徒にふさわしい物質的・精神的家庭生活の要として既婚女性が位置づけられ、家庭内領域は女性の領域だとされた。その中でも食が既婚女性の評価に直結しており、食が既婚女性の関係性の要となっている。既婚女性は、家事労働に携わることで母子や夫婦の関係の中に自己を位置づけており、儀礼実践による自己定義（Hayami 2004）からの変容が指摘できる。

③ミャンマーでは、ヤンゴンとパアンにて、教会組織や神学校、出版所（Bible Society）で組織の全体構造や宣教活動、神学教育、聖書翻訳についての聞き取りとカレン語文献の収集を行ったが、初めてのミャンマーへの渡航だったことに加え、雨季の移動の制限と調査日数の制限の中で全体像を把握するための十分な調査とはなっていない。ヤンゴンでは、キリスト教徒の生活がいわゆる宗教や信仰で想定される事柄の枠組みを超えて、世俗的な日常生活が多岐に渡ってキリスト教に規定されているのに対して（例えば教育、識字、言葉の用い方、男女の役割分業、社会関係、経済的な活動）、パアンでは、教会組織の世俗的な役割は学校教育の提供と細々とした開発プロジェクトに限られている印象であった。

参考文献

Hayami Yoko. 2004. *Between Hills and Plains : Power and Practice in Socio-Religious Dynamics Among Karen* (Kyoto Area Studies on Asia No.7). Kyoto University Press.

真宗総合研究所彙報　2018. 4. 1 ～ 2018. 9. 30

■研究所関係

◎研究所委員会

◇2018 年５月 17 日㈭12：20～12：40(博綜館第４会議室)

１．特別研究員の人事について

２．2018 年度研究組織について

◇2018 年６月 27 日㈬12：20～12：40(博綜館第５会議室)

１．特別研究員の人事について

２．2018 年度研究組織について

３．私立大学研究ブランディング事業について

◇2018 年７月 20 日㈮10：00～10：35(博綜館第４会議室)

１．東方仏教徒協会規程一部改正（案）について

２．中国蔵学研究中心との協定締結について

３．その他

◎研究ブランディング事業ワーキングチーム会議

◇2018 年５月 24 日㈭12：20～12：55(博綜館第４会議室)

１．2017 年度進捗状況

２．その他

◇2018 年８月２日㈭10：00～11：00（博綜館第４会議室）

１．外部評価について

２．オープンキャンパスでの活動

３．HP 作成について

新しい時代における寺院のあり方研究

【揖斐川町　寺院・門徒・地域調査】

日　時：2018 年５月８日㈫
　　※電話による聞き取り
内　容：法性寺・聞き取り調査

日　時：2018 年６月 15 日㈮
場　所：揖斐川町春日下ヶ流地区集会施設（岐阜県揖斐川町春日）
内　容：岐阜県揖斐川町春日総区長・遍光寺門徒聞き取り調査
参加者：山下憲昭・徳田剛・藤枝真

日　時：2018 年６月 15 日㈮
場　所：光永寺（岐阜県揖斐川町春日）
内　容：光永寺・今後の調査に関する打ち合わせ
参加者：山下憲昭・徳田剛・藤枝真

日　時：2018 年６月 15 日㈮
場　所：真宗大谷派大垣教務所（岐阜県大垣市）
内　容：西蔵寺・聞き取り調査
参加者：東舘紹見・藤元雅文

日　時：2018 年６月 23 日㈯
場　所：長光寺（岐阜県揖斐川町春日）
内　容：長光寺・聞き取り調査
参加者：山下憲昭・本林靖久・藤元雅文・磯部美紀

日　時：2018 年７月 28 日㈯
場　所：光永寺（岐阜県揖斐川町春日）
内　容：光永寺・門徒（３名）聞き取り調査
参加者：山下憲昭・徳田剛

日　時：2018 年８月２日㈭
場　所：サンビレッジ宮路サンヒルズ・ヴィラ・アンキーノ
内　容：長光寺・門徒（１名）聞き取り調査
参加者：木越康・東舘紹見・藤元雅文・松岡淳爾

日　時：2018 年８月６日㈪
場　所：寂静寺（岐阜県揖斐川町春日）
内　容：寂静寺・門徒（３名）聞き取り調査
参加者：藤枝真・藤元雅文

【日本宗教学会パネル発表】

日　時：2018 年９月９日㈰
場　所：大谷大学
発表題目：人口減少時代における地域と寺院のあり方研究
参加者：木越康（研究代表）・徳田剛・藤元雅文（以上、大谷大学）
　　中條曉仁（静岡大学）
　　※コメンテータの櫻井義秀（北海道大学）は、北海道胆振東部地震の影響のため不参加

【報告会】

日　時：2018 年４月６日㈮13：30－17：00
場　所：真宗大谷派しんらん交流館
内　容：「能登地域寺院調査」報告会
参加者：徳田剛・磯部美紀（大谷大学大学院修士課程２年・研究補助者）

【ミーティング】

◇第１回
日　時：2018年４月４日㈬15：00－16：30
出席者：木越康　東舘紹見　山下憲昭　徳田剛　藤枝真　藤元雅文　松岡淳爾　磯部美紀
場　所：真宗総合研究所ミーティングルーム
内　容：2018年度における研究調査の概要について

◇第２回
日　時：2018年４月17日㈫14：40－16：10
出席者：東舘紹見　山下憲昭　徳田剛　藤枝真　藤元雅文　松岡淳爾　磯部美紀
場　所：真宗総合研究所ミーティングルーム
内　容：2018年度研究内容および宗教学会の発表について

◇第３回
日　時：2018年５月８日㈫14：40－16：10
出席者：東舘紹見　山下憲昭　徳田剛　藤枝真　藤元雅文　松岡淳爾　磯部美紀
場　所：真宗総合研究所ミーティングルーム
内　容：学外講師による研究会（案）について
寺院、門徒調査について

◇第４回
日　時：2018年５月22日㈫14：40－16：10
出席者：東舘紹見　山下憲昭　徳田剛　藤枝真　藤元雅文　松岡淳爾　磯部美紀
場　所：真宗総合研究所ミーティングルーム
内　容：寺院、門徒調査の具体案の検討など

◇第５回
日　時：2018年６月５日㈫14：40－16：10
出席者：東舘紹見　山下憲昭　徳田剛　藤枝真　藤元雅文　松岡淳爾　磯部美紀
場　所：真宗総合研究所ミーティングルーム
内　容：寺院、門徒調査におけるスケジュールの確認など

◇第６回
日　時：2018年６月19日㈫14：40－16：10
出席者：東舘紹見　山下憲昭　徳田剛　藤枝真　藤元雅文　松岡淳爾　磯部美紀
場　所：真宗総合研究所ミーティングルーム
内　容：寺院、門徒調査（６月15日）報告など

◇第７回
日　時：2018年７月10日㈫14：40－16：10
出席者：東舘紹見　山下憲昭　徳田剛　藤枝真　藤元雅文　松岡淳爾　磯部美紀
場　所：真宗総合研究所ミーティングルーム
内　容：寺院、門徒調査（６月23日）報告など

◇第８回
日　時：2018年８月28日㈫9：30－11：00
出席者：木越康　東舘紹見　山下憲昭　徳田剛　藤枝真　藤元雅文　松岡淳爾　磯部美紀
場　所：真宗総合研究所ミーティングルーム
内　容：寺院、門徒調査（７月、８月分）報告および『研究紀要』論文投稿について

【学外講師による研究会】

◇第１回
日　時：2018年５月28日㈪18：00－19：30
場　所：真宗総合研究所ミーティングルーム
講　師：那須公昭氏（浄土真宗本願寺派　総合研究所　研究員）
講　題：「浄土真宗本願寺派の過疎認識とその対策」

◇第２回
日　時：2018年７月２日㈪18：00－19：30
場　所：響流館３階　メディア演習室
講　師：中條曉仁氏（静岡大学・准教授）
講　題：「過疎地域における寺檀関係の持続可能性」

国際仏教研究

＜英米班＞

【会議】

◇2018年４月25日㈬12：10－13：00
国際仏教研究班　全体ミーティング
於：真宗総合研究所内　ミーティングルーム（響流館４階）
参加者：Robert F. Rhodes、Michael J. Conway、藤元雅文、上野牧生、井黒忍、松川節、新田智通、加来雄之、Dash Shobha Rani、田中潤一、常塚勇哲、鶴留正智

◇2018年７月27日㈮16：20－17：50
ELTE大学学会パネル発表等打ち合わせ
於：真宗総合研究所内　ミーティングルーム（響流館４階）
参加者：木越康、Robert F. Rhodes、井上尚実、Michael J. Conway、藤元雅文、上野牧生、

常塚勇哲、鶴留正智

◇2018 年８月９日㈭13：00－14：30
ELTE 大学学会パネル発表等打ち合わせ
於：真宗総合研究所内　ミーティングルーム（響流館４階）
参加者：Robert F. Rhodes、井上尚実、Michael J. Conway、藤元雅文、上野牧生、鶴留正智

【海外出張】
◇ヨーロッパ宗教学会パネル発表
日　程：2018 年６月 17 日㈰－21 日㈭
於：ベルン大学
参加者：Robert F. Rhodes、Michael Pye

◇ELTE 大学　共同シンポジウム発表
日　程：2018 年９月 17 日㈪－18 日㈫
参加者：木越康、Robert F. Rhodes、井上尚実、Michael J. Conway、藤元雅文、上野牧生

【国内出張】
◇『歎異抄』翻訳研究ワークショップ
日　程：2018 年６月 22 日㈮－24 日㈰
於：龍谷大学　大宮キャンパス
参加者：井上尚実、Michael J. Conway、谷口愛沙、澤崎瑞央、本多正弥、Yul Otani、常塚勇哲、鶴留正智

◇日本宗教学会パネル発表
日　程：2018 年９月８日㈯
於：大谷大学
参加者：井上尚実、Michael Pye、下田正弘、John LoBreglio

【公開講演会】
日　時：2018 年８月７日㈫16：30－18：00
於：マルチメディア演習室（響流館３階）
題　目：チベット仏教史－サキャ派系譜を中心として－
講　師：目片祥子（ハーバード大学南アジア学科ポストドック研究員・チベット語講師）

＜東アジア班＞
東アジア班では、中国華北・東北・東部モンゴル地域の宗教と文化の研究および戦前・戦中期の真宗大谷派の海外布教に関する研究を進めるとともに、「中国古代史及び敦煌・トゥルファン文書研究」国際シンポジウムの成果をまとめた論文集の翻訳・編集作業を進めた。

西蔵文献研究
【海外出張】
◇８月 18 日㈯～８月 25 日㈯
場　所：モンゴル国オヴォルハンガイ県ハラホリン市、アルハンガイ県ホトント郡、ツェツェルレグ市、イフタミル郡、ボルガン県モゴド郡
目　的：「モンゴルにおける仏教の後期発展期（13～17 世紀）の仏教寺院の考古学・歴史学・宗教学的研究」を推進するため。特に遺跡の空撮と碑文の撮影のため。
出張者：松川節（研究員）・山口欧志（嘱託研究員）

【公開講演会】
◇４月 27 日㈮16：30～18：00
於：響流館３F マルチメディア演習室
講　師：ソナム・ドルジェ（中国蔵学中心図書資料室館員）
講　題：「清代に北京で開板されたチベット語文献とチベット古文献の保護について」（Ching rgyal rabs skabs pe cin du par ba'i bod yig dpe cha dang bod yig gna' dpe'i srung skyob skor bshad pa）

◇６月 29 日㈮16：30～18：00
於：響流館３F マルチメディア演習室
講　師：S. デムベレル（モンゴル国立大学総合科学部哲学・宗教学科講師）
講　題：「モンゴルで新たに発見されたチベット語仏教文献」（Newly discovered Tibetan Buddhist scriptures from Mongolia）

ベトナム仏教研究
【研究打合せ】
◇４月 23 日㈪13：00～14：30
（真総研ミーティングルーム）
今年度のキックオフミーティングを開催した。今年度の研究計画・方法についての確認を行い、今後の活動全般について意見交換を行った。

【研究会】
◇５月 14 日㈪13：00～14：30
（真総研ミーティングルーム）
『禅苑集英』解読研究

◇5月28日㈪13:00〜14:30
（真総研ミーティングルーム）
『禅苑集英』解読研究

◇6月4日㈪13:00〜14:30
（真総研ミーティングルーム）
『禅苑集英』解読研究

◇6月18日㈪13:00〜14:30
（真総研ミーティングルーム）
『禅苑集英』解読研究

◇7月2日㈪13:00〜14:30
（真総研ミーティングルーム）
『禅苑集英』解読研究

◇7月16日㈪13:00〜14:30
（真総研ミーティングルーム）
『禅苑集英』解読研究

◇9月24日㈪13:00〜14:30
（真総研ミーティングルーム）
『禅苑集英』解読研究

清沢満之研究

【ミーティング】

◇第1回ミーティング
日　時：2018年4月19日㈭11:00〜12:10
出席者：西本祐攝、大艸啓、藤井了興
会　場：真宗総合研究所フリースペース
目　的：一昨年度からの引継ぎ
『清沢満之全集』別巻刊行の全体計画
現存データ、資料等の確認

◇第2回ミーティング
日　時：2018年5月10日㈭13:00〜14:30
出席者：西本祐攝、大艸啓、藤井了興
会　場：真宗総合研究所フリースペース
目　的：校正作業の進捗状況報告
活字文献研究補助者の選定

◇第3回ミーティング
日　時：2018年5月17日㈭10:40〜12:10
出席者：西本祐攝、大艸啓、藤井了興、研究補助者２名
会　場：真宗総合研究所フリースペース
目　的：活字文献校正作業の手順等説明
校正作業の進捗状況報告

◇第4回ミーティング
日　時：2018年6月7日㈭10:40〜12:10
出席者：西本祐攝、大艸啓、藤井了興
会　場：真宗総合研究所フリースペース
目　的：校正作業の進捗状況報告
自筆文献研究補助者の選定
新出文献『我信念』「書簡」、『俗諦と道徳との交渉』「書簡」の報告、掲載の検討

◇第5回ミーティング
日　時：2018年6月12日㈫16:20〜17:50
出席者：西本祐攝、大艸啓、藤井了興、研究補助者２名
会　場：真宗総合研究所フリースペース
目　的：自筆文献校正作業の手順説明
校正作業の進捗状況報告

◇第6回ミーティング
日　時：2018年7月5日㈭11:00〜12:10
出席者：西本祐攝、大艸啓、藤井了興
会　場：真宗総合研究所フリースペース
目　的：校正作業の進捗状況報告
新出文献「無上大法」「開化ト真理」掲載の検討

◇第7回ミーティング
日　時：2018年7月12日㈭10:40〜12:10
出席者：西本祐攝、大艸啓、藤井了興
会　場：真宗総合研究所フリースペース
目　的：校正作業の進捗状況報告
全体会議での検討事項確認

◇第8回ミーティング
日　時：2018年7月25日㈬16:20〜17:50
出席者：西本祐攝、大艸啓、藤井了興
会　場：真宗総合研究所フリースペース
目　的：校正作業の進捗状況報告
『清沢満之全集』別巻の目次案検討

◇第9回ミーティング
日　時：2018年8月22日㈬10:40〜12:10
出席者：西本祐攝、大艸啓、藤井了興
会　場：真宗総合研究所フリースペース
目　的：校正作業の進捗状況報告
『東洋大学百年史』記述内容の検討

清沢満之記念館出張の検討、依頼

◇第 10 回ミーティング
日　時：2018 年８月 31 日㈮10：40～12：10
出席者：西本祐攝、大艸啓
会　場：真宗総合研究所フリースペース
目　的：校正作業の状況確認
清沢満之記念館出張時の作業内容確認

◇第 11 回ミーティング
日　時：2018 年９月 11 日㈫16：20～17：50
出席者：西本祐攝、大艸啓、名畑直日児、藤井了興
会　場：真宗総合研究所フリースペース
目　的：清沢満之記念館出張の物品等の準備、資料の保存等の検討、スキャニングの確認

◇第 12 回ミーティング
日　時：2018 年９月 20 日㈭10：40～12：10
出席者：西本祐攝、大艸啓
会　場：真宗総合研究所フリースペース
目　的：校正作業の状況確認
校正作業時の判別困難なものの検討
清沢満之記念館借用資料の扱いの確認

◇第 13 回ミーティング
日　時：2018 年９月 27 日㈭16：20～17：50
出席者：西本祐攝、大艸啓、藤井了興
会　場：真宗総合研究所フリースペース
目　的：校正作業の進捗状況報告
英字文献研究補助者の選定

【研究班全体会議】
◇第１回全体会議
日　時：2018 年４月 25 日㈬16：20～18：00
出席者：西本祐攝、一楽真、加来雄之、藤原正寿、大艸啓、川口淳、藤井了興
会　場：真宗総合研究所ミーティングルーム
議　題：本年度の研究班の運営体制について
本年度の研究活動について
『清沢満之全集』別巻刊行の全体計画について

◇第２回全体会議
日　時：2018 年７月 25 日㈬18：00～19：30
出席者：西本祐攝、一楽真、加来雄之、藤原正寿、福島栄寿、大艸啓、名畑直日児、川口淳、藤井了興
会　場：真宗総合研究所ミーティングルーム
議　題：別巻刊行に向けての体制確認
出版社との交渉の現状報告
校正作業の進捗状況報告
別巻構成案の検討
新出文献「条約改正論」と既出文献との関係の検討

【出張調査】
日　程：2018 年９月 27 日㈭～28 日㈮
場　所：西方寺（愛知県碧南市）
目　的：雑誌『徳風』の調査、資料の借用
出張者：名畑直日児（嘱託研究員）

大谷大学史資料室
【研究会参加】
◇全国大学史資料協議会西日本部会　2018 年度総会・第１回研究会
日　程：2018 年５月 22 日㈫
場　所：大阪女学院大学
参加者：松岡智美・老泉量

◇全国大学史資料協議会西日本部会　2018 年度第２回研究会
日　程：2018 年７月 31 日㈫
場　所：京都市学校歴史博物館
参加者：松岡智美

【ミーティング】
◇2018 年４月４日㈬13：00～13：30
出席者：阿部利洋・松岡智美・老泉量
場　所：真宗総合研究所
内　容：2017 年度の成果報告と、2018 年度の活動計画と図書館エントランス展示の内容確認

◇2018 年５月 30 日㈬9：30～10：10
出席者：阿部利洋・松岡智美・老泉量
場　所：真宗総合研究所
内　容：大学史資料協議会から依頼されたアンケートへの対応と６月からの図書館エントランス展示の内容確認

◇2018 年９月 10 日㈪10：30～12：00
出席者：阿部利洋・松岡智美・老泉量
場　所：真宗総合研究所
内　容：外部より依頼された大学史資料の確認

【大谷大学史資料室スポット展示関係の作業】
◇2018年4月17日㈫18:00～19:30
「大谷大学の誕生」の展示準備
　参加者：松岡智美・老泉量
　場　所：大谷大学図書館入口展示スペース

◇2018年6月26日㈫18:00～19:30
「大谷大学の誕生」の展示撤収、及び「大谷大学キャンパスの変遷」の展示準備
　参加者：松岡智美・老泉量
　場　所：大谷大学図書館入口展示スペース

◇2018年9月14日㈮17:00～17:30
「大谷大学キャンパスの変遷」の展示撤収
　参加者：松岡智美・老泉量
　場　所：大谷大学図書館入口展示スペース

上記の活動以外にも、大谷大学史資料室では大学史資料の調査・整理や、閲覧・質問等への対応を日常業務として行った。

また、展示作業に際しては、大谷大学博物館からの協力を得た。ここに謝意を記す。

デジタル・アーカイブ資料室（パーリ関係）
【国内出張】
◇2018年5月26日㈯
　場　所：龍谷大学　大宮学舎
　目　的：学会発表
　出張者：清水洋平

◇2018年7月27日㈮
　場　所：龍谷大学　大宮学舎
　目　的：研究セミナー「日本とタイの仏教交流の諸局面」での発表（発表題目：「経典をめぐる交流の史実と現実」）
　出張者：清水洋平

■東京分室
東京分室指定研究
【出張】
◇2018年8月6日㈪～11日㈯、15日㈬～16日㈭
　出張先：テュービンゲン大学（ドイツ）
　用　務：テュービンゲン大学中央図書館と同神学部図書館において13世紀～14世紀にかけてのドミニコ会とアウグスティノ会の説教関連資料の収集・複写
　出張者：松澤裕樹

◇2018年9月7日㈮～9日㈰
　出張先：大谷大学（日本宗教学会参加）
　用務：公開シンポジウム参加および研究発表会参加
　出張者：池上哲司、稲葉維摩、藤原智、松澤裕樹

【研究会】
◇2018年4月4日㈬
　内　容：前期共同ゼミ計画打合せ

◇2018年4月11日㈬
　内　容：東方・西方両教会の修道院における「祈りと労働」の実践調査報告
　発表者：松澤裕樹

◇2018年4月18日㈬
　内　容：2018年度計画作成

◇2018年5月2日㈬
　内　容：親鸞における阿闍世という課題
　発表者：藤原智

◇2018年5月9日㈬
　内　容：13～14世紀におけるドミニコ会霊性の形成と展開
　発表者：松澤裕樹

◇2018年5月23日㈬
　内　容：パーリ語の時制研究の紹介
　発表者：稲葉維摩

◇2018年5月30日㈬
　内　容：『教行信証』研究史に見る親鸞像
　発表者：藤原智

◇2018年6月6日㈬
　内　容：ドイツ神秘思想における「根底」の諸相
　発表者：松澤裕樹

◇2018年6月20日㈬
　内　容：仏教混交サンスクリット語における a－語幹名詞の語末－a について
　発表者：稲葉維摩

◇2018年6月27日㈬
　内　容：親鸞研究のあり方について
　発表者：藤原智

◇2018 年７月４日㈬
内　容：ギリシア教父における人間神化論の系譜
発表者：松澤裕樹

◇2018 年７月 11 日㈬
内　容：仏教の無明に関する一考察
発表者：稲葉維摩

◇2018 年７月 18 日㈬
内　容：親鸞による『論語』の引用
発表者：藤原智

◇2018 年７月 25 日㈬
内　容：アウグスティヌスの時間論と記憶論における人間神化思想の片鱗
発表者：松澤裕樹

◇2018 年８月 22 日㈬
内　容：エックハルトの三位一体論における存在論
発表者：松澤裕樹

◇2018 年９月５日㈬
内　容：第６回「宗教と人間」研究会計画

◇2018 年９月 12 日㈬
内　容：パーリ語の直説法現在とアオリスト
発表者：稲葉維摩

◇2018 年９月 26 日㈬
内　容：第６回「宗教と人間」研究会最終打合せ

【公開研究会】
◇2018 年８月３日㈮16 時～（親鸞仏教センター５Ｆセミナー室）
第５回「宗教と人間」研究会
繁田真爾氏（明星学園教諭／早稲田大学現代政治経済研究所特別研究員）
「監獄教誨の歴史－「悪」から見た近代」

個人研究藤原班
【出張】
◇2018 年４月 21 日㈯
出張先：西方寺
用　務：近角常観×清沢満之シンポジウム
出張者：藤原智

◇2018 年４月 25 日㈬
出張先：学士会館
用　務：親鸞仏教センターのつどい
出張者：藤原智

◇2018 年６月７日㈭～９日㈯
出張先：浄土真宗本願寺派広島別院
用　務：真宗連合学会第 65 回大会参加・発表
出張者：藤原智

◇2018 年６月 30 日㈯～７月１日㈰
出張先：大谷大学
用　務：第二十五回真宗大谷派教学大会参加・発表
出張者：藤原智

◇2018 年９月１日㈯～２日㈰
出張先：東洋大学白山キャンパス
用　務：日本印度学仏教学会第 69 回学術大会参加・発表
出張者：藤原智

◇2018 年９月 14 日㈮～15 日㈯
出張先：群馬大学荒牧キャンパス、群馬大学北軽井沢研修所（田辺記念館）
用　務：田辺元記念哲学会求真会臨地調査研修
出張者：藤原智

個人研究松澤班
【出張】
◇2018 年５月 26 日㈯
出張先：龍谷大学
用　務：2018 年度龍谷大学国際社会文化研究所研究会に参加
出張者：松澤裕樹

◇2018 年８月 12 日㈰～14 日㈫
出張先：①テュービンゲン大学中央図書館＆神学部図書館（ドイツ）、②ハイデルベルク大学（ドイツ）
用　務：①マイスター・エックハルトとニコラウス・クザーヌス関連文献の収集・調査、②Reiner Manstetten 氏（ハイデルベルク大学講師）との学術交流
出張者：松澤裕樹

◇2018 年８月 30 日㈭
出張先：東京大学駒場キャンパス

用　務：第18回東方キリスト教学会例会に参加
出張者：松澤裕樹

■人事

■特別研究員

□新規採用（2018年8月24日付）

＊阿部　友香
現　　職：任期制助教
研究期間：2018年8月24日～2020年3月31日
研究課題：農業奉公の歴史社会学的研究－労働を通じた社会的包摂に着目して

研　究　所　報　第73号

2019年2月1日　発行
編集発行　大谷大学真宗総合研究所
〒603-8143 京都市北区小山上総町
Tel. 075-411-8498 Fax. 075-411-8435
Email. kenkyusyo@sec.otani.ac.jp

©2019 Otani University Shin Buddhist Comprehensive Research Institute